

研究資料

『新增書目』翻印

—住吉派・板谷派の絵画鑑定及び模写に関する記事を中心に—

下原美保*

(二〇一八年十月二十三日 受理)

The transliteration of *Shinzo-yomoku*: articles about painting appraisal and the reproduction in the Sumiyoshi School and the Haya School

SHIMOHARA Miho

要約

本稿は『新增書目』（松浦史料博物館）における住吉派や板谷派の絵画鑑定及び模写に関する記事を活字化したものである。

本書は平戸藩第九代藩主松浦静山が創設した楽歳堂所蔵の文獻目録であるが、絵画に関しても項目が立てられ、その伝来や画題の内容、制作年代や筆者、画風についてのコメントが静山自身の言葉によって語られている。その際、静山が助言を求め、手控え用の模写を依頼したのが幕府の御用絵師である住吉派や板谷派である。また、本書から松平定信を中心とする知的ネットワークや考

証学的学問態度の広がりを知ることができる。本書を活字化し、公刊することで、近世御用絵師における絵画鑑定や模写、考証学的学問態度の研究に寄与することができると考えられる。

キーワード：住吉派、板谷派、絵画鑑定、模写、考証学的学問態度、松浦静山、楽歳堂、松平定信、谷文晁

解題

『新增書目』とは、平戸藩第九代藩主松浦静山（清 一七六〇―一八四一）が創設した楽歳堂所蔵の文獻目録であり、内篇、外篇、部目を併せて二十三冊から成る。『甲子夜話』の著者としても知られる静山は文教面でも多大な功績を残しており、和漢籍や洋書を広く収集している。『新增書目』は、分野ごとに文献を紹介した目録であるが、絵画に関しても項目が立てられ、その伝来や画題の内容、制作年代や筆者、画風についてのコメント等が静山自身の言葉によって語られている。その際、静山が助言を求め、手控え用の模写を依頼したのが、幕府の御用絵師である住吉広尚（一七八一―一八二八）や住吉派の支流である板谷派の絵師・慶意広長（一七六〇―一八一四）、桂舟広隆（一七八六―一八三一）である。また、本書では住吉広行（一七五四―一八一二）による鑑記や両家所蔵の画史・画論書類も参考にされている。

さらに、本書で注目すべきは、当時流行した考証学的学問態度の広がりを、絵画鑑定や模写の側面から知ることができる点である。松平定信（一七五九―一八二九）を中心とした知的ネッ

〔釈家上〕「●経●律儀●論●儀疏」

『新增書目 外篇 三之下』〔子類之二〕〔釈家下〕〔法家〕「●語録●偈頌●雜著●伝記」

『新增書目 外篇 四之上』〔子類之三〕〔縦横家〕〔雑家〕「農家」「小説家」「兵家」「天文家暦数」

『新增書目 外篇 四之下』〔子類 四〕「五行家」「医家」「芸術家」「類家」「天主」

『新增書目 外篇 肆弓』〔集類〕

『新增書目 外篇 蛮国 肆弓』〔外篇 蛮書〕「詞書」

「医科」「天文地理」「生物」「言事」「兵戦」「巧芸」

卷冊…部目一冊・内篇十四冊・外篇八冊

成立…「自庚申冬至辛酉」（『新增書目 内篇 完』）「内篇 部目」「外篇 部目」（寛政十二年〔一八〇〇〕）「享和元年〔一八〇一〕」

書写者…松浦清

『新增書目』における住吉家・板谷家関連記事

凡例

以下の翻印において、「○」「□」「」は原文のままである。翻印の都合上、一部の棒線や枠外の端書は省略し、漢字はできるだけ通行の字体を用いた。ただし、異体字・固有名詞については一部底本のまま表記した。また、合わせ字の「ノ」は「シテ」に、「フ」は「コト」に、「タ」は「ヨリ」に、「凡」は「トモ」に、「凡」は「トキ」に改めた。

●相撲節會之圖 原本松岡清助蔵文政己卯模写 一幅

是ハ相撲ト云フコトニ就テ、松岡辰方ノモトニ之ヲ問ヒタルトキ、彼ノ家蔵ノ本トテ示セシノ模ナリ。図モト下手ノ所レ模ル。画力甚拙ニシテ、雖レ不ト足レ見ルニ、其状体ハ則可シレ挽ル。○公事根源集釈云、相撲、是ハ諸国ノ供御人ヲ召集メテ、七月ニ相撲ノ節ト云ヒテ、天子ノ御覧スル事也。先ツ十六七日ノ間ニ召仰セアリ、上卿勅ヲ奉テ、左右ノ次將ニ相撲アル可キ由ヲ召仰セラル。左右ノ近衛、方ヲワケテ、国ニ使ヲ下テ相撲ヲ召ス、是ヲ万葉ニモ、コトリ使ヒト申也。廿六日ニ内取ト云フ事有リ、主上仁寿殿ニ出御ナル。左右ノ相撲人、犢鼻ノ上ニ狩衣袴ヲ着テ、一同ニ相撲ヲ取テ勝負アリ。廿八日小召合アリ、天皇南殿ニ出御ナル。王卿参上ス、大將相撲ノ奏ヲトリ、十七番トリテ、勝ノ方乱声アリ。又廿九日ニ、拔出トテ、相撲ヲスグリテ御覧セラル、也。〔原本、図ノ傍ニ記シテ云ク、大和守大伴ノ積興ハ、此書大伴ノ積興師ヨリ令ニ恩借一、中町旅宿ニ於テ写レ之畢、可シニ秘蔵ス二云云、于レ時天明三年十一月十日、酒井常次郎源忠、押字疑、輔、字欽松岡辰方、図上又有二印、日、松岡家之蔵○其図、正面御簾ヲ垂ル、殿上、親王大臣納言列次ノ体、又御簾ノ外、大將奏聞ノ体、階下、群宜列座ノ体、廷上ノ正面、左右ノ次將向ヒ立、相撲ノ人角觥スル体、其下相撲ノ長、立合、列立、相撲人ノ円座ヲ置ノ体、其下、相撲人幄内ニ群座ノ体、又廷上ノ末、左右ノ伶人東西ニ列シ、鐘鼓ヲ設ル体、皆画レ之。○此図ノ原本ヲ、画家住吉内記ニ問フニ、曰、此図未ダ曾所レ見アラズ、且某ノ家ノ粉本ニモ亦此図ナシ、至極面白キ図ナリ、雖レ然、アマリ古キ図ニハ有ルベカラズ、委曲ハ埃ツ二面陳フ二ト、挽レ之ニハ、京師ノ或人ノ家ニ所レ伝ルモノカ、抑又近時ノ人、古事ヲ

採録シテ所作^ル図^ヲ乎。文政二年己卯秋

(『新增書目 内篇 卷貳二』「公事 図式 朝廷」)

●相撲之繪 亦原本松岡之藏 同年模写。

一軸

此図モ与三前図一同ク、下手ノ模、画法甚拙シ、然レドモ古体ハ最可シ見ツ、好古小録云、相撲人ノ図一卷、画基光^ノ及公望^ノ、基光ノ子阿闍梨^ノ其図、古昔相撲ノ事皆徴スベシ、基光ノ画存スル者此外ニミズ、」是即此絵本ヲ謂^フナリ、因住吉廣尚ニ質^スニ、曰、図ノ始メヨリ揮^テ結^ル体迄、金岡ノ孫巨勢公茂ノ筆、立合スル体ヨリ、裸^ニ体^ニ狩衣ヲ着^テ二人立^テル体迄、土佐ノ祖春日基光^ノ筆、人ヲ遂退ル体ヨリ弓ヲ執^ル体ノ処迄、又公茂^ノ筆、相撲ノ人角觚^{スル}所、基光ノ弟子阿闍梨公三人ナリ」ト、然レハ弥^ハ此図也、住吉ノ家ニモ此本アリ、請^テ之ヲ視^ニ、図ノ体正^ニ同シ、唯其写ノ古図ヲ善写セシ者ニシテ、其真本ニアラズ、真本今何^レノ処ニ有^ル不^レ聞^レ之^ヲ、又松岡カ原本ニ別図ヲ添^フ、抄写ニシテ件ノ図ト同物也、而人物ノ体大^ニナリ、因是非ヲ廣尚ニ問^フニ、是ノ図彼ノ先人廣行ガ、抛^テ古図ニ其体ヲ画ク者ト、然レバ同物ナレド、其体精^{シテ}、還^テ抛^テ之^ニ古体ノ実ヲ想^フベシ、因テ俱ニ襲藏ス、○基光^ハ土佐系図ニ記ス、初ハ盛光^ノ内匠頭、越前守、白河院ノ頃、然^レハ白河帝ノ元年ヨリ、至^レ今七百四十八年、為^スレ古ト、○公望^ハ、土佐ノ系図ニ公茂トス、又公持、皆同訓ナリ、因^テ然^リ、画史ニ云、巨勢ノ公望、世^ニ其家^ヲ、小野宮ノ大臣造^リ二屏風ヲ、使^{シテ}公望^ヲ一画^カ中小松^ヲ上、按^{ルニ}日本史^ヲ、小野宮大臣ハ藤ノ実頼ナリ、而其薨天禄元年ニシテ、年七十一ト有^レバ、然^レハ其生^ル年、昌泰三年ニシテ、醍醐帝ノ御時ナリ、因算^ル之^ニ、其薨年ヨリ至^レ今八百五十一年、自^リ基光^ノ時^ニ又古シ、然^レハ系図ニ基光^ヲ

白河ノ頃ト云^フ者、可^シ疑^フ、○阿闍梨ハ其名ヲ記^セス、小録基光ノ子トス、住吉ノ所^ニ云^フ、基光ノ弟子トス、不^レナ^ラ、又土佐ノ系譜ニ、基光ノ弟ニ山ノ阿闍梨行海アリ、其孫ニ山ノ阿闍梨行智アリ、此人ト為^ルカ、

(『新增書目 内篇 卷貳二』「公事 図式 朝廷」)

●日光山衆徒延年舞圖

一幅

此延年ノ舞ト云^フハ、南都ノ興福寺ニアリテ、自^レ古其事歴々タル欤、故ニ延年式ナド云^{ヘル}遺書モ今伝^ハレリ、光山ノ舞モ、將軍家ノ御代ニ、彼^レヨリ移シ伝^ヘラレシ所ナラン、今モ年年之ヲ行ハル、又此図ハ、即所^レ舞^フノ僧某ノ舞容ヲ、東叡王ノ坊官、岸本応齋ガ目^マノ当^リ画写セシ者ナリ、一日応齋図ヲ予^ニ示ス、予^ノ因テ模写ス、光山ノ延年舞ノ容色ハ、以^レ之^ヲ目撃スベシ、又画家住吉内記ノ所貯^ルノ粉本、日光延年ノ舞ノ図ノ傍記ニ云^フ、延年ノ舞ハ、一山大衆之内ノ附弟、兩人順番ニテ役^レ之、舞方秘託ノ伝法有^レ之^ヲ、由^テ三仏堂ノ前、舞台ヲ設^ケ、附第一人、白キ五條ノ袈裟ニテ頭ヲ裹^フ、少^サ刀ヲ後^{ウシロ}ノ方ヘ斜^メニ帶^ビ、立烏帽子、末広扇ヲ持チ、一人ハ、白キ五條袈裟ニテ頭ヲツ、ミ、少^サ刀ヲ帶^シ如^シ前腰ニ斜^ニ帶^スル也舞^レ之^ヲ、又云^ク、延年ノ舞、烏帽子ハカムリ不^ス申^サ、扇モ末広、日ノ丸ハナシ、太刀モ少^サ刀、斜^ニ帶^フ、袍、赤ニ黄交^リ、檜皮色也、白大口袴、」所^レ図^ルノ舞装服色、与^レ之^ノ不^ス異^ラ、タゞ所^レ図^ルニ末広ノ扇ヲ不^ス画^カ、文化戊寅ノ正月

(『新增書目 内篇 卷四之下』「管弦 歌舞 舞」)

●日光延年舞圖

一軸

此図ハ、画家住吉内記ノ所貯ノ粉本ノ模ナリ、原図ニ記シテ云ク、延年ノ舞、日光三仏堂ノ前ニテ舞フ之ヲトアリ、且其容体ハ云フニ及バス、舞装ノ注文ヲ始メ、御神事ノトキ、日光奉行ノ着服、其時所レ与ルノ僧徒ノ有リ様、此舞ノ次第、舞台樂場ノ図、詳ニ記シ出ス、

(『新增書目 内篇 卷四之下』「管弦 歌舞 舞」)

●東遊舞圖

与レ前合卷

亦住吉ノ所貯ルノ模ナリ、此舞年年日光ニ於テ之ヲ行ハル、蓋朝廷ノ所レ錫ノ舞ナリ、又東遊伝来ノ記アリ、舞人並陪從ノ装束、悉ク皆之ヲ載セリ、

(『新增書目 内篇 卷四之下』「管弦 歌舞 舞」)

●胡蝶迦陵頻装束之圖

二軸

右ハ、此舞ノ様体ヲ聞ント欲ルコトアリテ、浴恩老侯ニ其舞装ヲ問フ、侯答ニ其図ヲ以テ示サル、最詳ナリ、乃模写シテ留レ之ヲ、其外袋ニ題ス、京来リ迦陵頻胡蝶装束ノ図、文政二年二月調進、蓋京師ノ伶工ノ所レ進ルナリ、然レハ当今朝廷及京撰ノ間ニ所用ル者也、可シレ真トス、又住吉ノ画家ニ所ニ画伝スルノモノハ、此図ト有リ異コト、思フニ古昔ノ様体ナル当シ、与レ今異ル者変遷其理ナリ、田

宏殿ノ樂曲考ニ所レ云フハ、迦陵賓ハ胡蝶、此曲ハ天竺ヨリ出テタル也、樂人四人、或ハ六人、必ス童舞也、一而胡蝶ノコトハ記シ給ハス、蓋亦童舞、其目●兩舞様体全図●天冠ノ図●袍ノ図●袴同シ●腰帶●脚絆●袍ノ紋真図●迦陵頻羽形ノ図●胸當●背●翼ノ表裏●尾ノ本●尾●羽根付ケ様雛形写●胡蝶羽形ノ図●胸當●背●翼ノ表裏●同ク下カリ 全ク

(『新增書目 内篇 卷四之下』「管弦 歌舞 舞」)

●妓舞圖 且覽筆 模写

一幅

コノ図京師ノ人江都ニ寓スル者ノ手ニ得、乃模写シテ返ス、名記アリ、且覽筆、一印ヲ押ス其文土佐定繼カ、篆文未審之画様ハ真ノ墨絵ナリ、首ニハ立烏帽子ヲ冒リ、ウスモノ、上ミヲ着ス菊綴アリ、衣ハ五キヌト覺シク、下モハ大口ノ体ニシテ又菊綴アリ、ソノ下タニハ緋袴ヲ曳ク、虎皮ト覺シキ尻鞆シタル白太刀ヲ佩ビ、右手ニ絵出シタル十一骨ノ扇ヲ披ク、是レ何ニ拠テ画ケル其体ヲ知ラズ、因テ住吉氏ニ質スニ、廣尚カ曰ク、舞ノ図全ク白拍子ノ体ナリ、太刀ヲ帶タルヲ以テ見レバ嶋ノ千歳トモ謂フベシ、装束分リ難シ水干ナルベキ乎、菊綴ナクハ狩衣トシテ然ラン、袴モ亦分リ難シ、大口ノ状ニシテ菊綴アリ、愈ク審ニセズ、若クハ鎌倉時世ノ直垂ノ下モナルベキ乎、五衣ノ状モ不審ナキニ非ズ、名ノ且覽ト云フ者未知ラズ、筆意ニ由テ考フレバ土佐ノ光成ノ風アリ、然レバ且覽ハ光成ノ弟子ト為ン乎ト、○土佐系譜ヲ按ルニ、光成ハ左近將監光起ノ子、右近將監法名常山、系譜ニ光起俊水尾院ノ比ノ人トスレバ、時代茲ニ因テ考フベシ、古画ト謂フベカラズ、然ドモ亦近世ノ者ナラズ、

(『新增書目 内篇 卷四之下』「管弦 白拍子」)

●病草紙

享和壬戌夏因土佐内記店行所藏之本模写原本亦模本也

一軸

此本、紙表ニ記シテ云、病草紙、光長筆、出所不レ知、光長ハ、土佐刑部太輔ナリ、所レ図三十五種、又、先二天明戊申、尾張ノ勝富朝臣ノ所レ藏異疾図一本ヲ模ス、今之ト校スルニ、雖レ有ニ小

異其圖皆同、而先二所得ノ者ハ、図十七種、此本ハ乃十八種ヲ倍ス、因按二、勝富朝臣ノ本ハ、其原本、尾張ノ三橋公熙ナル者、浪華ノ市ニ得テ、其紙錯雜セシヲ、聚テ一卷ト為セシト云、且、其画正シク光長ノ筆蹟ト云ヘバ、廣行カ本ノ、出所不レ知ト云ヲ以テ思二、公熙ノ本、其始三十余種アリテ、散逸ノ後、公熙之ヲ得、廣行之模本ハ、先レ是二所模伝ナル当シ、惜ラクハ今其十八ヲ亡シヲ、又、貞幹好古小録ノ所レ記、疾草子、一卷、画光信ト云者是ナリ、

(『新增書目 内篇 卷四之下』「医書 雜病」)

●異疾圖

模本

一軸

此本原画工板谷桂意所藏寛政庚申多紀安長法眼模写之享和紀元辛酉余又再模之

此本所レ図十七種、毎レ図有二詞書二、其目、○侏儒○僂僂○白子○黒鼻○半月○鎖肛○口臭○霍乱○陰蝨○尻癰○眼疾○齒搖○重舌○睡病○風病○瘧斑○渴睡、而其画体古シ、因之ヲ桂意ニ正スニ、曰、コレ中務大輔隆親ノ所レ画乎、此真蹟ノ原本、尾公ノ医臣某藏レ之、意モ其模本ヲ以テ伝フ、故未レ視二其真蹟一、然トモ因二其画勢一定レ之、中務隆親ノ所レ画ナル当シ、而隆親ハ元永永曆間ノ人、拠レ之元永永曆ハ、鳥羽崇徳近衛後白河二條ノ朝臣、距レ今六百八十六年、然トキハ當時ノ形態、信二此図ニ由テ知ベシ、豈不レ可二珍重一乎、画史云、藤原隆親、隆能子也、任備前守一、又為二伊予守一、叙從五位下一、晚年任二中務少輔一、始名隆成、曾為二絵所一、

享和癸亥青陽閏陔

(『新增書目 内篇 卷四之下』「医書 雜病」)

●長門國阿弥陀寺源平合戦圖 一幅

コノ図ハ、彼国ノ寺ニ安德帝ノ影堂アリ、其壁ニ絵テアリシ所ナリ、日本史安德紀云ク、建久二年、後鳥羽帝勅シテ、長門一建二阿弥陀堂一、薦三天皇、冥福ヲトアル、コノ御堂ナルベシ、予モ嘗テ東上西帰ノ路必スコノ寺前ヲ経、又予カ旅舎伊藤某ノ宅ハ彼寺ノ向フナレハ、時々微行シテ往見ルニ、天明ノ末、始テ視シ頃ハ、彼ノ御堂ノ古色実ニ後鳥羽帝ノ時建ラレテ、冥福ノ御為シテ、具平氏盛衰ノ絵モ御菩提ノ為ナラント覚シクシテ、其御堂ハ小キ御所ニテ、中央ニ少帝ノ御木像ヲ安置シ奉リ、前ナル間ノ壁ニカノ合戦ノ絵アリテ、御後ノ間ニハ帝ノ官女公卿ノ像ヲ壁毎ニ画キ、親シク帝ノ側ラニ左右スルカ如シ、造営ノサマハ、檜皮葺、格子戸部ナドアリテ、縁ニハ欄階ノ設ケ、ソノ構作最モ古色ヲ存シテタウトク見ナシタリシガ、是ヨリ寛政ノ頃旅セシトキ見タレバ、其時ニハ破壊ニ及タリ連、帝ノ御堂ハ解除キテ、最大ナル今風ノ本堂ヲ造立シ、其中ニカノ戦図モ公卿ノ像モ一枚ゾ、処々ニ掛ケテ、寺僧等ガ絵トキシテ参詣ノ人ニ見セ居タリ、予モナゲカハシク立寄テ視タルニ、其トキハハヤ二位禪尼ノ少帝ヲ抱キ奉テ入水セントスル船中ノサマ杯ハ、玉体モ湮滅セシヲ何者カソレモ拙手ノ処為トシテ墨クロク書キ補ヒタルサマ、古色ハ失テ嘆々モ余アリ、其他与一ガ射ントスル扇ノ竿頭ニ鏃ミタル体モ、其頃ハハヤ剥落シテ形ハ無クナリイタリ、コノ外ニモ宗盛ノ作りシ唐船ノ体、以前ニ見覺タル武者ノサマ杯、失去リ、或ハ後人ノ書キ繕ヒシ者ナド処々ニ見ヘタリ、又其時カ彼寺ノ書院ニ通リテ休息セシニ、画工ノカノ絵ヲ模写シイタル故、立寄テ何カニト問タレバ、執政定信朝臣

樂翁老侯当職ノトキナリノ、領主萩侯ニ、松平大膳大夫定信朝臣ノ縁家ナリ請

レテ写シテ贈ラル、ト言キ、此画工ハ、支侯此地ノ領主毛利甲州ノ臣ニシテ、洞玉ト云ル者ナリシ、是コノ絵ノ世ニ広ク伝ハリシ始ナリ、予モコノ画工ニ憑テ少帝ノ御像ヲ真写セシハ此時ナリ、夫ヨリ後又往見タルトキハ、少帝ノ御堂トテマス、今俗ノ座鋪ト謂フ如クミツラヘ、玉体ヲ遷シ彼絵像ヲモ左右ノ壁ニハリ、其画幅ノ縁ニハ金砂子ナド施シテ、弥々俗体ヲ重ネタリキ、此後ハハヤ旅行モ為ズ、何カニナリケン、知ラズ、然ルニ後ハ白川侯ト婚家トナリ、愈々往来スレバ、乃時トシテ彼絵ノ昔申出タルニ、正シク家藏セラル、ト答ラレタリ、夫ヨリ過ギ文政三四ノ頃カ、老侯ニ請テ借置キ、今年ニ至テ模写ノ功一幅ヲ成シ、尋テ原幅ハ返完セリ、因画者ヲ考ルニ、コレ世ニ名高キ品ナレドモ、貞幹ガ輯録セル好古小録ノ中古書画ノ條ニモ載セズ、故ニ画家住吉廣尚ニ問タレバ、曰フ、先年父廣行存在ノトキ白川侯ヨリ筆者ヲ問給ヒキ、此トキ誰ト答申セシヤ今知ラザレドモ、常ニ某等ニ語レルハ、阿弥陀寺ノ源平合戦ノ絵ハ何カニモ古体ニ見ユレド、恨ムラクハ、後人ノ潤色多クシテ心得ガタキ所アリ、筆体誰トモシリ巨シ、其上申伝ヘモ無シト毎ニ申タリ、合戦ノ外ニ公卿等ノ肖像十幅アレドモ、是亦後人ノ修加ヲ經タルモノカ、然ドモ冠服ノ体ニテ勘フレバ、右ハ隆信ノ筆ニモヤ有ルラント亡父言示セリ、合戦ノ絵ハ同人筆トモ思ハレズト、右ハ廣尚ノ答ナリ、画史ニ云ク、藤原隆信ハ任ス右京大夫ニ、善クレ写ス、元暦年中ノ人也、即是カ、

(『新增書目 内篇 卷六乾』「人之伝上 史余之部 画記」)

●畫師草子 信実筆圖書アリ

一軸
コノモノハ古キモノニテ、信実自ラ画記セシ所ニシテ、己レ其時

状ヲ述タル者ナリ、然ドモ斷篇ニシテ錯簡ナルモノト覺ユ、コレ卷軸ノ流伝セシ間、離合乱所セシナル当シ、予嘗テ清末侯ノ藏ヲ模写シテ架藏トシ、松山侯ノ藏ノ、カノ脱漏ノモノ有ルヲ以テコレニ補置シヲ、戊寅ノ災ニ焼失ヒタリ、因今癸未ノ春、画家板谷桂舟ニ借テ、再模テ藏書トス、画史ニ云、藤原信実ハ藤ノ隆信ノ子也、曾テ為ル右京権ノ大夫ト、工ニシ和歌ヲ、且善ニ図画ヲ、最モ長セリ、於写真ニ、諸画モ亦優柔、為ス中世ノ妙手ト、仕ヘ後鳥羽順徳両院ノ朝ニ、馳ニ譽ヲ于時、一、挽レ之ニハ、コノ画軸ハ當時信実ノ世ノ容想知ルベクシテ、其頃ノ事態モ識得ベシ、詞書ハ則信実ノ自伝ニシテ、唯々恨ム脱僅全カラズ、貞幹ノ好古小録ニ曰、画師ノ草子一卷、画ハ信実、結構俗氣ナシ眼ヲ悦バシムベシ、其サマ貞幹ノ言ノ如シ、○又信実ハ絵ノ事ヲ以テ仕ヘシ人ト聞ユ、詞書ノ中ニ云ク、我道ノワサナレバ、真ノ有サマヲ後策ニハアラハシテ、同モラシ申ナルベシ、又此画ハ信実中年ノ所レ為ス、詞書ノ文ニ、コノ思ヒ、少年ノ昔ヨリ強仕ノ今ニ及フ迄、ト見ユ、年代推シレ之テ知ルベシ、

(『新增書目 内篇 卷六乾』「人之伝上 史余之部 画記」)

●静於鎌倉若宮法樂白拍子舞之圖

一幅

此図ハ文政三年庚辰ノ夏、修驗行智ガ拳ニ依テ模写ス、原石丸氏某ノ所レ藏ト云フ、然ルヲ建部六左衛門旗下ノ人ノ手寄ニ因テ就写ヲ得タリ、是レ義經記ニ記スル、静於鎌倉若宮「白拍子ヲ舞」ノ体ナリ、然ドモコ、ニ所レ図ノ静カ舞装、並ニ囃子三士工藤畠山梶原ノ装束、義經記ノ所レ云フト不ス同カラ、又舞台ノ前ヘ、人ヲ驅ル等ハ記ノ言ノ如シ、何カ、後人伝説ニ因テ、巧手ヲ以テ新作セシ者

カ。○此画住吉廣尚カ所鑑ハ、元和貞享ノアタリノ筆ニテ、称ル町絵ト者ナリ、或ハ若ハ、紬原ノ勸進能ナドノ時ノ、法楽舞ノ形代ニ仍テ画クカ。○又云ク、此絵巻軸ノ断物ニハ非ジ、雲ノ胡粉ノ彩法違フ欤。○又云ク、若クハ二代目又兵衛ト云ハンカ、或ハ、ツット古キ町絵ナランカ。要スルニ珍シキ画図而已。〔『新增書目 内篇 卷六乾』「人之伝上 史余之部 画記」〕

●待賢門合戦繪圖

一軸

コノ一軸、屋代弘賢ガ得タルト聞テ、請テ模写ス。屋代ガ得ル者モ亦模本ナリ、或人曰フ、コノ原本東叡王府ニアリ、某膏テ王府ニ仕ルトキ、夏日曝書ノ日コレヲ視ルト。○此模本奥書アリ、曰ク、土佐ノ大納言光信ノ筆写シ、天和三癸亥ノ年三月十四日写レ之、明和七庚寅ノ年六月二日写終ル。東叡山ノ仏絵所幸田良恭主、武者数二百十八人、馬形数百三十八匹、二口合テ三百五拾六也。一抛レ之ニバ、蓋シ東叡府ノ本モ亦模ナリト思ハル、然レバ原本何レノ所レ有ルカ、明和ノ写ト云フ者ハ、全ク王府ノ本ヲ写セシコト明カナリ、然レドモコノ本眞写、明細ヲ視ルニ由ナシ、又住吉内記ノ家モ亦コノ模本アリ、因テ比校スルニ還テコノ本ヲ善シトス、但ク古代ノ兜鎧、弓容馬状、旗劍長刀ノ有様、実ニ斯図ヲ拠トコロト為ス、応キ者也、珍重ト云ベシ。

追記 住吉廣尚曰、コノ画者ハ住吉法眼慶恩ニシテ、絵詞ハ家隆卿、今所蔵ノ所詳ナラズト、コレ彼ノ家ノ所レ伝ル、然レバ以レ茲是ト為ベシ、且慶恩ハ廣尚ガ遠祖ナリ、益ク正シ、又家隆ハ已ニコノ合戦ノ頃ノ人ナリ、然レバ画図ト雖ドモ則ソノ時代ノ態ヲ觀ルニ足レリ、又愈珍重トス。○奥書ニ、大納言光信ト云フハ

非ナリ、画史ニ云ク、光信叙スニ四位ト、何ゾ亜相タラン、又云ク、凡ツ古来倭画之有ル名者ハ、藤信実、僧覺猷、宅間、住吉等、是也、今光信ハ兼レ之ヲ合スレ之ト、コレヲ見レバ、コノ画者ハ光信ニ先ダツコト知ルベシ。

〔『新增書目 内篇 卷六乾』「人之伝上 史余之部 画記」〕

●江嶋縁起卷五

一軸

コノ画軸ハ、妓舞考索ノコトニ因テ、屋代弘賢ガ所蔵ヲ請テ移模ス、写手拙ナレバ原筆ノ真ハ失セリ、詞書アリ、全卷ニ非レバ委キヲ知ラザレドモ、慈覺大師創草ノ事ヨリシテ、安然和尚ソノ旧跡ヲ尋テ天女ヲ拜スル等、土御門ノ建永元年七月遷宮ノ状ヲ図ス、画中殿下ニ神樂男一人笛ヲ吹ク、同ク神人四輩鼓ヲ打ツ、今ノ小鼓ヲ肩ニスル体ナリ、皆竹箸ヲ以テ打テリ、殿前ニハ八人ノ女巫鈴ヲ持テ立舞フ、傍書シテ云、八人ノヤマトメト、此体珍ラシ、殿ノ傍ニ飯屋アリ、慈悲上人座セリ、住吉廣尚ノ答書ニ曰、江嶋縁起写一卷転覽ス、自家ニ旧蔵無シ、定カニハ申シ難ケレドモ、江嶋下之宮ノ什物ナルカ、嚮ニ深川八幡ニテ開扉ノコトアリシトキ此巻ヲ視タリ、其模ト思ハル、然ルトキハ天文ノ頃ノ画ナルベシ、筆者ハ定メ難シ、奥之宮ノ什物縁起ハ廣尚ノ家ニ所持スト、然レバ別本ナルベシ。

〔『新增書目 内篇 卷六乾』「人之伝上 史余之部 画記」〕

●大臣影繪卷物

四軸

原本、画家住吉廣行所蔵、文化二年乙丑閏八月、需之廣行、因廣行自模其本而贈、○此卷原上下二軸也、為不便展覽、今分為四軸、○原本外袋ニ記テ云、御数寄

屋御道具之内ニ有之候。大臣之絵御卷物。古画之趣。先年父内記廣守拝見仕候由。兼而申聞承知仕候。拝見之義奉願候者。奉恐入候義ニ御座候得共。家業為心得。奉願拝見仕度奉存候。何卒拝見被仰付候様ニ仕度。奉願候。以上。コレ廣行ノ所レ呈レ官ノ上書ノ文。直ニ之ヲ題記セシ者ナリ。又云。奥書

文昭院様御筆ニテ可有哉。亦廣行ノ所レ記○本書奥書ノ文。大臣影。豪信法印筆也。銘染愚筆了。不可出闕外耳。此下有花押「大臣八十人像。藏在陽明藤太閤之家焉。其像則僧豪信所画。而其跋語未詳其人也云。画様字体。一照原本搨写著色。装成二卷。藏之於東武秘府。宝永六年十月十八日。後ノ奥書。則廣行ノ記ニ文廟ノ御筆ト云シ者也。一日林

祭酒此図ヲ視ル。曰。此跋恐クハ御文ニ非シ。東武秘府ト云者。語不レ穩。○廣行

曰。豪信ハ信実朝臣右京權大夫ノ曾孫也。然トキハ。其時世大抵所レ画ノ諸公ト前後同レ時ス。扱レ之トキハ。此諸公ノ影ハ。肖像ニシテ。豪信ノ目撃スル所ニ成ル乎。故ニ今。此諸公ノ像ヲ画ント欲ルトキハ。此図ヲ以テ其真ト為ス。」図像。清盛公ノ影。溫柔和平。イサ、カ無。廓

容一。重盛公ノ影。嚴烈赫然。還テ有ニ威色一。実朝公ノ影。面貌鄭野。曾テ閑雅ノ状無シ。甚ニ人ノ与レ所ニ想像一異リ。大略如レ此。余皆説一其伝一可ニ比照ス一。又画史云。僧豪信能レ画。為ニ山法師一。藤信実六世孫也。或曰。所在洛西梅津長福寺花園宸影者。豪信奉命所写也」以茲スレハ時世既ニ遠シ。然トキハ廣行ノ言似レ不レ当。然トモ花園帝ノトキ尚古シテ彼諸公ト不レ遠。因レ之ハ。豪信言ノ所レ伝アルニ由テ所レ画ナル可シ。以

レ今觀レ之レハ。所レ可ニ扱取一ノ者ハ。不レ之シテ而何ニカ依ル。珍重スヘキ所ノ図也。文化丙寅春正月識○大臣像画次（上卷）。家忠公花山院左大臣・有仁公花園左大臣・宗忠公中御門右大臣・頼長公宇治左大臣・実行公八條太政大臣三条・雅定公中院右大臣・実能公徳大寺左大臣・宗輔公京極太政

大臣・伊通公九條太政大臣又号大宮・公教公三條内大臣・公能公大炊御門右大臣・宗能公中御門内大臣松本・経宗公中御門大炊御門・清盛公福原太政大臣又平相国・忠雅公花山院太政大臣・師長公妙音院太政大臣・重盛公小松内大臣・宗盛公八嶋内大臣・実定公後徳大寺左大臣・雅通公土御門内大臣・良通公冷泉内大臣・実房公三條左大臣・兼雅公後花山院左大臣・兼房公禪

林寺太政大臣又号高野・忠親公中山内大臣・頼実公六條太政大臣又中山大炊御門・通親公土御門内大臣・隆忠公大覚寺左大臣松殿・実宗公坊條内大臣又六條・忠経公花山院右大臣・道経公近衛右大臣・良輔公八條左大臣・公繼公野宮左大臣・信清公坊門内大臣・公房公浄土寺太政大臣三條・実朝公鎌倉右大臣征夷大將軍・家道公近衛左大臣・通光公後久我太政大臣・公経公一條太政大臣西園寺・師経公大炊御門右大臣不任大將。（下卷）。良平公醍醐太政大

臣九條・実氏公常磐井太政大臣西園寺・定通公後土御門内大臣・基家公月輪内大臣鶴殿・実親公浄土寺右大臣三條・家嗣公嵯峨内大臣大炊御門・家良公衣笠内大臣・実基公徳大寺太政大臣又水本・道良公九條左大臣二條・具実公堀川内大臣又岩藏・定雅公後花山院太政大臣又粟田口・公相公冷泉太政大臣西園寺・公基公京極右大臣西園寺・実雄公山階左大臣洞院・公親公後三條内大臣三條・冬忠公香隆寺内大臣大炊御門・通雅公後花山院太政大臣・通成公三条坊門内大臣中院・師経公花山院内大臣又堀川・通基公後久我内大臣・基具公堀川太政大臣・実兼公西園寺太政大臣・信嗣公嵯峨太政大臣大炊御門・公守公山本太政大臣洞院・定実公土御門太政大臣・公孝公後徳大寺太政大臣・実重公二條太政大臣・公衡公竹林院左大臣西園寺・内実公栖心院内大臣一條・経平公後峰妙寺左大臣近衛・具守公後岩藏内大臣又堀川・実泰公後山本左大臣洞院・公顯公今出川右大臣西園寺・公茂公押小路内大臣三條・家定公花山院内道右大臣・有房公六條内大臣・通重公後三条坊門内大臣中院・師信公後花山院内大臣・冬氏公光福寺内大臣大炊御門・兼季公今出川右大臣又菊亭

〔『新增書目 内篇 卷六坤』「人之伝 公卿 図像」〕

●天満天神聖像 菅相公ノ像ナリ

一幅

コノ像ハ住吉内記廣尚ガ絵所ノ所レ藏、予請テ模写ス、ソノ始シテ文政六年二大久保主水官ノ墓屋ガ版施ノ菅像ノコトニ依テ、内記ニソノ原本ヲ観シコトヲ問フ、廣尚因テソノ所レ藏ノ粉本ヲ示ス、是廼ソノ図ナリ、図ニ題ス、昔渤海ノ奉使吾ガ太宰府ニ来リテ聖客ヲ拝シ、臨模セル所ノ肖像ナリ、筑紫ノ横尾某ガ累代伝ヘ来テ裔孫横尾唱ニ及ブ、(中略)横尾氏ハ菅家ノ旧臣ニシテ、衛中迄モ従事セル者、儼然タル聖像子孫永々保テル、賞スベキニ堪タリ、宝暦丙子謹記、コノ記誰人タル不レ詳、記ノ全文ニ拠ルニ蓋シ東都ノ人、或ル日内記ト話ス、曰フ、コノ図粉本ヲ以テ蔵ムト雖ドモ、少シク信ジ難キ者ナリ、姑ク古物トシテ伝フト、未ダソノ故ヲ聞カズ、○追記ス、廣尚書通ニ、亡父廣行曰フ、コノ図菅人ノ為ニ模写セリ、然ドモ何トモ意得ガタキ神影ナリト、

〔『新增書目 内篇 卷六坤』「人之伝 公卿 図像」〕

●六孫王經基朝臣像

一幅

此画原本、前年冬、住吉内記ノ宅ヲ訪テ之ヲ視ル、但彼カ粉本ナリ、因テ桂意内記ノ弟ノ子桂舟ニ憑テ模写ス、之ヲ視ルトキ、予其所レ出ヲ問フ、内記曰、其原画掛幅ニシテ、桂川甫周法眼ニ出ツ、且其モト所レ藏ノ所、画幅ノ裡等之ヲ記セズ、予因書ヲ遣テ甫周二問フ、答曰、原幅、田舎人某ノ手ニ得、其詳ナルハ重テ言ベシ、而至レ今尚其答ナシ、紛冗之ヲ忘セル也、日本史云、源經基、貞純親王長氏也、親王、清和第六皇子、以故世称經基為六孫王、善和歌、

有武略、便弓馬、天慶中為武藏介、歷任至太宰府大貳、鎮守府將軍、正四位上、天德五年、除王籍、賜姓源朝臣、卒年四十二、」即、今ノ將軍家ノ鼻祖ニテ座スナリ、文化五年戊辰夏六月記、此像三枚ヲ一幅トス天保乙未

〔『新增書目 内篇 卷六坤』「人之伝 武家 図像」〕

●甲州惠林寺藏武田信玄像

一幅

此像世ニ或ハ云フ全ク不動ノ像ナリト、予疑フ、因十余年前幸ニ惠林寺從持護山來テ市谷ノ月桂寺ニ寓スルヲ聞ク、乃予天祥ノ南道和尚ヲ伴テ往テコレニ遇ヒ、且コノ像ノコトヲ語ル、護山予カ意ヲ好シ、曰ク今幸ニコ、ニ携來レリトテ出示ス、予恩借ヲ乞フ、護山諾シ、兩三日ニシテ其像及信玄ノ甲冑、神祖ノ所レ賜ノ文書等ヲ、從徒ニ持セテ鳥越ノ邸ニオクル、予因テ予シテ画師函工等ヲ召聚テ、皆就テ模写シ襲藏ノモノト為セシガ、過シ戊寅ノ災ニ悉ク焚亡ス、自レ是シテ月時ニコレヲ恨ム、然ルニ近頃徳祐公ノ墓表ノ事ニ因テ、彼寺ノ土小見山勘兵衛ナル者予カ隱邸ニ來往ス、因テ今ノ住持某ニカノ像ノ模先年焼失セシコトヲ言遣ス、土コレヲ伝フ、於茲翌壬午ノ春、寺徒耕藏司ト云ニカノ画像ヲ持セ再レ借与ス、予乃模写シ、遂ニ旧時ニ復ス、○其外箱ニ記ル、信玄公ノ尊像、逍遙軒御筆ト、然ハ當時ニシテ信玄ノ所レ命ルノモノカ、ソノ像ハ長ケ一尺一寸五分ニシテ、甲冑ヲ着セリ、頭ハ兜ヲキズ、白毛ニシテ螺髪ナリ、所レ服ルノ鎧ハ黑威ニシテ、胸板ニ金ノ丸龍ヲ出ス、所レ佩ルノ横刀ハ朱鞘ナリ、右手ニハ劍ヲ執テ直豎シ、左手ハ索ニ非ズシテ念珠ヲ持セリ、又白色有紋ノ袈裟ヲカケタリ、身ハ岩上ニ立テ、背後ニ火焰アリ、不動ノ像ト

云ハンモ宜ヘナリ。画史ニ云ク。武田逍遙軒ハ信玄之弟也。性好ムレ絵ヲ。善ク写スニ信玄之寿像ヲ。一。掇レ之ニバコノ像ハ疑ナキ者ナリ。視ルニ其画法筆勢今ノ狩野家流ノ毫法ナリ。画史前ニ信玄ノ画ヲ論ズル條ニ。筆法如シニ能相ノ。其風韻甚タ清シテ而不レ凡ナラト。以レ茲ヲスレバコノ像若クハ後人伝写ノモノ、違ヘルカ。抑逍遙軒ノ所レ画クハ如キレズモノカ。予嘗テ住吉廣尚ニコノコトヲ云ヒタルトキ。廣尚答シモ。此像ハ狩野氏ノ風アリテ近世ノ画筆ノミ。疑ヲ存スル者ト云キ。・此像三枚ヲ一幅トス天保六乙未

(『新增書目 内篇 卷六坤』「人之伝 武家 画像」)

●慈眼大師真像

一枚

慈眼大師ハ天海僧正ノ勅号ナリ。此像ノ原本ハ住吉内記廣行ノ所レ伝ナリ。廣行ノ先廣通。称スニ内記ト。其少年ニ。大師叡山ニ住セシトキ。学問修業ノ為ニ。侍童トシテ親ク大師ノ左右ニ居ル。名ヲ千夜刃丸ト曰フ。長スルニ及デ。其弟子トナリ。為レ僧トテ叙シニ法眼ニ。名ヲ如慶ト更ム。如慶少年ノ頃ヨリ画ヲ善クス。世ニ住吉法眼如慶ト云ハ此人ナリ。即今ノ内記ノ家ノ興祖ナリ。因テ此像ヲ画キシコトハ。見ノ当リ大師ヲ視テ。其真ヲ図セシナリ。乃大師ノ命ズル所ト云フ。然ルトキハ。真容モ又真ナル者也。最モ正シ。予先年廣行ノ家ヲ訪テ此図ヲ視ル。故ニ其像ヲ模シコトヲ需テ而得テリ之ヲ。文化十一年甲戌ノ春ナリ。如慶後関東ニ仕ヘ。還俗シテ内記ト曰フ。神祖ノ大阪陣ノ御時。其年十八ト云フ。

(『新增書目 内篇 卷六坤』「人之伝 神釈 画像」)

●兆殿主肖像 住吉内記廣尚之粉本文化丙子夏模写 一幅

此原図ハ。兆殿主ノ自ラ所レ画クト云。像半身右向。風容如シレ見ルカ。実ニ真肖ト為ベシ。像ノ下ニ書ス。吉山明兆。行年三十二。永徳三年六月十八查レ之ヲノ廿字ヲ書ス。字底ニ印記アリ。壺形。像ノ上題讚アリ。云ク。諸仏非スニ我道ニ。何ニ者カ是我道。父母非スニ我親ニ。阿誰是我親。衣破レテ戒不レ破。身貧ニシテ道不ズレ貧ナラ。多劫ニ植テ德本ヲ。乗ルニ此ノ大願論ニ。有時ニ拈ニ起シテ一毛頭ヲ。現出ス五百ノ大比丘。編思昔時ノ老禪月。与ニ此ノ吉山一ニス風流ヲ。移来ル一会ノ天台山。見者聞者。嗟嘆。退耕ノ隱者性海叟。摩ニ拏シテ老眼ヲ子細ニ看ル。也奇特不思議。天上人間希有ノ瑞。且道ヲ吉山是為レ誰。永明之孫智覺ノ子。吉山兆上人。図シニ東福ノ五百羅漢ヲ。不ズレ得ニ回錦ヲ。自ラ写ニ吾カ形ナラ。一。奉ニ呈ス北堂ニ。仍テ詰クニ其証ヲ。前ノ南禪退耕庵ノ主性海。隨テ需ニ而筆ストレ之ヲ云フ。明兆ハ。画史ニ云ク。僧明兆。号ニ吉山ト。淡路ノ人。為リニ東福寺ノ大道ノ弟子。自リニ少年ニ甚好ムニ図画ヲ。大道甚戒ムレ之ヲ。至ルレ欲ルニ絶ントニ師資ノ之約ヲ。於レ是ニ明兆以ヘ為ラク。凡被ル棄ニ道路ニ者ハ破履也。今我以ニ絵ノ事ヲ被ラル。棄ニ大道ニ。因レ之ニ以ニ破草鞋ヲ。為レ号ト。一日偶ク候。大道師ノ出ルヲ。而画クニ不動ノ像ヲ。師忽還ル。兆驚キ騒ヒテ。藏スニ之ヲ於膝下ニ。時ニ画中ノ火焰勃起シテ不ズレ能ハレ掩フコト。自リレリシ師モ亦服シテ其神ニ不ズレ戒メレ之ヲ。応永ノ間為リニ東福寺之殿主ト。而住スニ南明院ニ。○又此ノ讚辭ノコトモ。画史ニ。始明兆老母在ニ淡路国ニ。臥スレ病ニ。故ニ欲スニ一見。兆時ニ在ニ東福寺ニ。方ニ画ニ五百羅漢ヲ。其功未タズレ半ナラ。雖レ背クトニ老母之命ヲ。仏像図画之事。又不レ忍ヒレ捨ルニ之ヲ。因自ラ写シテ真ヲ。

致^メ之^ヲ於^ニ母^ニ慰^ム其^心ヲ^一。退耕庵ノ性海賛スニ其像ニ^一。曰ク。衣破
 テ戒^ス不^レ破^レ。身貧^ニシテ道^ス不^スレ貧^{ナラ}。」「此像著^{ツケリ}ニ破^{ツケリ}納^ヲト見エテ。
 何^{イカ}ニモ衣ノ破^レタルヲ結^ヒ合^セテ著^{セリ}。是ニテ詳ニ知^ルベシ。又此
 図ヲ得シコトハ。住吉廣尚内記ノ粉本ヲ写ス。此粉本ノ原^{キト}ハ。安永
 中三年ノ事ト云東福寺開扉ノコトヲ官請シ。出府シテ浅草某ノ処ニ寓
 ス。且東福ニ所^レ有^ルノ宝物數種ヲ携フ。此図モ亦其一也。此時廣
 尚ノ父廣行内記聞^キ之^ヲ征^テ此像ヲ視^ル。因テ彼守僧ニ就^テ之^ヲ移
 写センコトヲ言フ。僧不^スレ許^サ。廣行言フコト再三ニシテ。僧尚^ホ
 不^スレ聽^カ。以^テ故^エ。廣行一日潜^カニ夜^ル往^キ。其懇求ノ情ヲ伸^ヘテ請
 フ^レ之^ヲ。僧ノ心稍^ク解^ケ。竟ニ密^カニ移写スルコトヲ得タリ。是斯
 ノ像ノ世ニ出^ツル始^メ也。後^チ然^{シヨリ}年アリ。而東福寺災アリ。此像
 時ニ焼亡スト。然^ルトキハ殿主ノ真蹟ハ。今見^ルニ無^シ由^{シト}雖ド
 モ。唯此図ヲ以テ觀^ルベシ。誠ニ廣行ノ画道ニ忠功アル善^{ヨシ}スベクシ
 テ。彼ノ僧ノ愚ニシテ不慈ナル。殿主ノ画志孝思ヲモ知^ラザル可^シ
 惡^ム。讀^フモ讀^ミ得^{ザル}者ナル^ベ。廣行^{ナカリ}微^セバ。今其豈^{ソレ}此像ヲ視
 ル者有^{ラン}也。

(『新增書目 内篇 卷六坤』「人之伝 神釈 図像」)

●官女之像

一幅

此図ハ。住吉内記廣尚ガ帳中ノ秘本ナリ。一日有^ツレ故^エテ視^ル之^ヲ。
 因模写ヲ請^テ為^スレ藏^ト。画者ハ。廣尚ガ先^ニ住吉法眼如慶俗称内
 記廣通ノ所^レ筆^{スル}ナリ。廣尚曰ク。此像何^シ人トスル。又何^ニノ為^メニ
 画^カク。今不^レ詳^{ナラ}。然^レドモ如慶ハ京師ノ人ニシテ。禁裏ノ画事ヲ
 掌^リシ者ナレバ。正シク官婢ヲ視^テ。而其像ヲ図^セシ者歟。然^ラバ
 是官女ノ真容ナル者也^ト。」「予因テ思フ。此図モト草卒ノ筆。タ^ゞ

其容ヲ写^セシ者ナリ。然^レドモ其真ニ因テ図^セシ所ト見ユレバ。全
 ク有^ルレ所^レ可^キレ扱^ル者已^ニ。如慶ハ住吉家伝ヲ見^ルニ。後水尾院後西
 院ノ朝ノ人ニシテ。距^{コト}今^ヲ年歴二百有余。殆^{シト}古人トス。文化
 丙子冬書

(『新增書目 内篇 卷六坤』「人之伝 宮闈 図像」)

●唐鞍饒馬之圖

二枚

諸鞍旧記考註^ニ曰。唐鞍ト云ハ。唐風ニ飾^ルヲ云フ也。鞍橋ノ名ニハ非
 ズ。南都春日ノ神殿唐戸ニ。唐鞍ノ絵ニ様アリ。是ハ後三條院ノ
 御宇ニ始テ画シヲ。其後修造ノ度毎ニ。旧様ヲ模シ伝フルト云フ。
 此絵ヲ見ザレバ。唐鞍ノ事ハ会得シ難シ。飾抄ニモ図見^ヘタレド
 モ。精シカラズ。春日ノ絵ト参考スベシ^ト記シテ。唐鞍馬ノ飾具
 ヲ抄写シタレドモ。伝写拙^フシテ其実ヲ知^リ難シ。因テ画家板谷氏
 ニ需^テ。春日ノ真写ヲ獲タリ。桂意ノ曰。板谷氏此図。京都ノ絵所
 土佐守。春日ノ図ヲ模テ藏タルヲ。伝写^セシ者ト。然^レバ其出処
 最正シ。且其図鮮明。委曲ヲ觀^ルベシ。土佐守ハ。板谷氏ノ本家ニ
 シテ。世ノ所^レ謂^フ土佐家ノ正系ナリ。此図可^キニ珍^ニ賈^スモノ也。

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑雑 古物 馬具」)

●養馬之圖

二枚

此圖原本。閣老松平豆州信明ノ。坐右ニ所^レ設^ルノ橿障^{ツイタテ}ニ所^レ貼^{ハル}ナ
 リ。蓋古画ナリ。文化壬申ノ年。予豆州ノ宴席ニ在^リ。視^テ此画
 ヲ賞ス。豆州嘉^シ之^ヲ借^シテ写^サシム。乃因テ模^シ模^シ架藏ス。其図ノ
 略。一ハ。二従者馬前ニアリ。一人叩^{ヒカ}レ轡^ヲ。一人ハ持^テ槌^ヲ以^テレ刀
 爪^{ツメ}斫^{キル}ノ状ヲ描^カク。俱ニ烏帽子素袍ヲ着ス。其容体古代ノサマ

也。一ハ、厩ノ中ノ図、槽ヲ置テ食セシテ、梁ヨリ腹繩ヲ下テ繫ク
之ヲノ状、屋ノ後ニ帷ヲ垂、前ニ席ヲ鋪ノサマ、近世ノ屋制ニ非ズ、
馬槽モ亦近世ノ物ト異ニシテ、古代ノ制ナルヘジ、因テ此時、画家
板谷廣長ニ質スニ、曰、画ノ状ハ近世ニ非レドモ、筆法ヲ觀ルニ、全
ク古ヘト謂レ難シ、然レドモ亦百有余年前ノ画ナルコトハ、疑フベキ
ニ非ズト言ヘリ、尚識者ニ就テ正スレ馬ヲベシ、文化乙亥冬記ス

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑雑 古物 馬具」)

●不動明王像 小川僧正承澄真筆

一幅

此像一幅ハ、文化十年癸酉ノ二月、上野ノ俊庵ニ詣ル帰途、東本願
寺ノ辺ヲ過キテ、路傍ノ書肆ニ、不動ノ神像ヲ画ケル掛幅アルヲ見
ル、表装垢敗スト雖ドモ、其画不スレ凡ナラ、予因テ人ヲ遣シテ就テ購
シム、其人方金三片ヲ出シテ買ヒ還ル、予近ク視ル之ヲニ、其画弥不
ズレ凡ナラ、思フニ百余年所レ画ク無シレ疑ヒ、然レドモ何人ノ所レ画ク不スレ
能ハ知ルコト、因テ官ノ画家住吉廣尚ニ就テ鑑定ヲ請フ、廣尚作テ鑑
記ヲ云ク、不動明王尊形一鋪小川僧正承澄真筆ト、然ルトキハ数百
年上ノ物愈ク無シレ疑ヒ、珍重ス応キモノ也、掛幅、帛ノ堅三尺五寸九
分、横一尺二寸四分、不動ノ像、長ケ一尺二寸九分、使者、矜羯羅
制多迦二童子ノ像、長ケ各七寸三步ナリ、但ク恨ムラクハ星歴ノ久シ
キ、不動ノ顔面殆ンド剥滅シ、タゞ両眼ト双牙ヲ存ス、余ノ身炎座右
ノ如キ、又二童子ノ像、皆顯然タリ、其容チトモニ含メレ靈アリ、画史
ニ云ク、小川僧正承澄ハ、為ニ横川ノ長吏ト、曾画クレ馬ヲ、其筆法似
鳥羽僧正ニ、一説ニ、承澄ハ即覺猷之別号也、又土佐家伝ニ云ク、小
川僧正ハ、安元養和ノ比ノ人、鳥羽僧正ハ、天治大治ノ比ノ人、
然レバ安元養和ハ、高倉安徳ノ年号ニシテ、距ルコト今ヲ六百四十余

年、若クハ小川僧正、鳥羽ト一人ナラバ、天治大治ハ崇徳ノ朝、
距ルコト今ヲ六百九十三年、俱ニ皆數百年上ノ画也、可キ愛重ス者、

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑雑 画図 真物」)

●不動明王像 親智海真筆

一幅

此像一幅ハ、一日与ニ諸客ニ書画ノコトヲ談ルトキ、客ノ曰、公嘗
テ所レ獲ノ小川僧正ノ不動ハ、殊ニ珍藏ナリ、予レ曰、頃又出テ
テ一幅ヲ視ル、所在モ亦嘗テ所レ視ト同シ、客ノ曰、然則其画ヲ視
ンコトヲ請フ、予明日使ニシテ人ヲ借ラレ之ヲ、而持還ル、人ノ曰、
価ノ曰、探幽ニ、視ニレ之其画陋劣、庸輩ノ所レ画ク也、予乃慍色
ス、人ノ曰、別ニ又有リニ一幅、予即令ムレ借ラレ之ヲ、人往テ速ニ持
還ル、視ル之ヲニ其画不スレ凡ナラ、威容頗ル備ル、人ノ曰、添フニ鑑
記ヲ、視ル之ニ曰ク、不動尊二童子一鋪、右釈智海真筆無レ疑者
也、文政三庚辰七月六日、住吉内記廣尚、証印、又有ニ半印ニ有リニ附
記ニ曰、伝ヘ書ス知海ハ天台宗ノ僧也、梵様ノ木筆ニテ、不動ノ像
ヲ多ク絵テ、名手ナリ、智海、明応四年十一月一日、或ハ七十五
歳ト書ス、古土佐ノ筆法、根来、覺範上人ノ画法、梵様ノ筆意用ル
物也、祖師伝与、本朝画印ニ伝有ル也、一捩レ之ニハ、明応ハ後
土御門ノ朝ニシテ、其四年月日ハ、蓋智海遷化ノ日ナリ、然ルトキ
ハ至レ今三百廿七年、為ニ古画ト、按ル年契ニ、明応四年乙卯ハ、雪舟帰
ル自リ明、文明元年ヨリ、二十七年ナリ、然ルトキハ舟ト時世ヲ同フセシ人也、○
知海、天台宗以下至テニレ七十五書ルニ、永納カ本朝画印ニ見ユ、○覺範ハ、当ニレ
改ム覺鑑ニ、画史ニ云、根来寺ノ開山覺鑑上人、天性能ク画ニク仏像祖師ヲ、詫間
為遠伝フニ画法、最善スニ梵書、多ク用ユニ木筆、一則以ニ木筆淡墨、図スニ不動ノ
尊像、掛幅、帛ノ堅二尺七寸八步、横一尺三寸、不動ノ像、長一尺

三寸三步、二童子、矜羯羅ハ長七寸一步、制多迦ハ屈状六寸五歩、計ルニ立状ヲ一七寸七歩画史ニ云、僧智海ハ、不知何許ノ人、以梵様ノ木筆、画ク不動尊及二童子ヲ、専ラ極ムニ奇怪之勢ヲ、其画後ニ云、智海七十五歳、明応四年乙卯十一月一日、或ハ画クト不動ノ像、十万余幅ヲ云フ、如レ此多、其筆レ之墨痕、在リ江州ノ飯道寺ニ、余見レ之、今所レ得必奇怪ノ状ナシ、所ニ其筆、モ木筆ナル乎、毛筆ノ画ノ如シ、然トモ古色顕然、文彩ヲ施スモ亦腹撲ナリ、可シ珍ス而今十万余幅ノ像、世見ルコト稀ナルハ、此言可シ疑フ、画家桂舟カ曰、斯人素非スニ画者ニ然トキハ塗法ノ不レ調ハモ宜ヘナリ、

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑雑 画図 真物」)

●殊菩薩像 住吉廣尚鑑定目勢有久所レ画 一幅

掛幅、帛中堅三尺一寸六分、横一尺二寸九分、菩薩座像、髻上ヨリ座足マデ高サ八寸四分、獅子立形、足下ヨリ頭上マデ一尺一寸二分、○此像ハ、故アリテ浅草寺ノ辺ニ真寿庵ト云ル真言僧ノ棲タル廃屋ニ往見タルニ、床頭ニコノ一幅ヲ掛ケタリ、殊ニ善画ナリト視タレバ、誰レ人所蔵カト問タレバ、彼廃宅ニ寓居セル真淨院ト云ル修験ノ物ト云、予寤寐ノ意アレドモ猶予シテ不スレ云ハ、真淨予ガ意ヲ察シ、之ヲ贈ラント云フ、予固ク辞シテ不スレ從ハ、後芝ノ神明ノ神官ニ聊恩恵スルコトアリ、神官予ニ謝スルニ此一幅ヲ以テス、蓋シ神官真淨ニ購求メ之ヲ転ゼシナリ、於テ茲ニ予ガ前志ト合フ、予亦天与トシテ乃蔵ム、一日画家廣尚洞益ノ輩ニ示スニ、皆云フ古畫最好シト、因テ廣尚ニ鑑定ヲ乞フ、不日ニシテ定マル、即其鑑記一札ヲ添フ、時ニ文政五年壬午三月ナリ、○巨勢有久ハ、板谷氏

家伝ニ云ク、巨勢ノ有康ハ嘉暦之頃、次ハ有久、次ハ有重文和之頃、而有久有重父子ナルヤ、又兄弟ナルヤ不レ詳、時代ハ如シレト、按ルニ嘉暦元年ハ丙寅ニシテ、後醍醐帝ノ八年ナリ、文和元年ハ壬辰ニシテ、北朝後光厳ノ元年、南朝後村上ノ正平七年ナリ、嘉暦ト相距ルコト廿七年、抛テ算スルニ、文和壬辰ヨリ今文政壬午ニ至テ四百七十一年、古画ト為ベシ、

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑雑 画図 真物」)

●如来荒神像 春日右近衛將監行盛筆ト定ル 一幅

コノ像ハ、宗閑田原町辺ノ路店ニ觀テ、携還テ所レ示、迺購藏ス、然ドモ画者ヲ審ニセズ、因テ住吉廣尚ニ鑑セシムルニ、前人ナル旨ヲ定ム、則鑑定ノ記ヲ附ス、文政八乙酉三月廿一日ナリ、○土佐系図ヲ按ルニ、行盛ハ行秀ノ子、行廣ノ孫ナリ、行廣ハ絵所ノ預、從五位ノ上土佐權守、永享二年大嘗会ノ屏風ノ筆者ト、行盛ノ時世コレヲ推テ測ルベシ、○所レ図ノ状、座像ノ長ケ、衣下ヨリ冠上マデ九寸五歩、総体ハ、台座ノ下ヨリ円光ノ上端マデ、一尺九寸七歩、一面六臂、蓮華ニ座シ、宝瓶ヲ台トス、種宝又左右ニ散在ス、○是レ元来南部ノ寺院ニ有リタル物カ、表装寧樂印金ヲ以テセリ、又総地ノキレモ南部ニ所レ用ノ者、且幅背ニ記シテ曰ク、三宝荒神、兆殿司ト、皆非也、蓋シ骨董及凡僧ノ所為ナリ、○梅塙曰ク、此仏ハ小島真奥ノ感得ノ像、愛染王ト金剛菩薩ト合体ノ容ニシテ、瑜祇位ノ大勝金剛ト同尊ナリ、故ニ殊ニ秘尊トス、大和国笠寺ニ安置スル所ノ、善無畏三藏自作ノ荒神ト称スル者、コノ像ト形様相同シ、又コノ画ハ春日画師ノ所レ図ル疑ナシ、梅塙ノ所レ視附合ス、

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑雑 画図 真物」)

●鬼子母神像 住吉廣尚鑑札附

一幅

或日、一画工告テ曰ク、田原坊ノ路店ニ鬼子母神ヲ絵ケル一幅アリ、靈容具ハルト、予即人ヲ遣スニ果テ在リ、迺購藏ス。○画中、母神一幼児ヲ抱キ、二小子左右ノ側ニ在リ、母神ノ長ケ左脅ノ下ヨリ宝冠ノ頂ニ至テ九寸七步、台座ノ下、左右ニ二童女竝ツ、左ハ足下ヨリ冠上ニ至テ九寸二步、右ハ同ク九寸六步、○廣尚鑑ス、画上手トス、思フニ南都ノ古代、絵仏師ノ所作ス無レ疑ヒ、但ク画名家ノ筆ニ非ル已ト、最古色アリ可シニ愛重ス。

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑雑 画図 真物」)

●五字文殊菩薩像 僧家信二定マル

一幅

コノ一幅嚮ノ年骨董某ノ手ニ出ツ、古画固ヨリニシテ、幅側建武元年ト記スルヲ以テ迺購求シ、画院廣尚ニ鑑セシム、云ク、五字文殊菩薩、僧家信ノ真筆無疑者也、文政六癸未ノ六月六日、画史ニ云ク、僧家信、能スレ画ヲ、為ニ山ノ法印ト、藤ノ信実ノ六世孫也、或ハ曰、所レ在ニ洛西梅津ノ長福寺ニ花園ノ院ノ宸影者、豪信奉シテ命ヲ所レ写也、抛之ニバ、信実ノ六孫ニシテ、花園帝ノ命ヲ奉シテ画キ、且年号等皆符スルカ、然レバ時代所レ疑フナキノミ、○又其図状ヲ云フニ、仏像髻上ヨリ座衣下迄九寸八步、又二重後光ノ上端ヨリ、乗タル獅子足下ノ蓮華マデ高サ二尺三寸三步、上ノ左右ニ、文殊法常尔法王唯一法、一切無人圖、一道出生死ノ四句ヲ題シ、又上ニ(文)ノ一字アリ、蓋シ曼殊師利ノ義、又円光ノ中五字ヲ記ス、**ハニヤアツ**コレ文殊五字ノ真言ト云フ、廣尚ガ五字ト云フ者是也、下ノ右傍ニ、建武元年六月九日相当ニ悲母聖靈ノ并コレ菩提ノ略字三七日ニ奉レ図シレ之ヲノ廿字アリ、其側ヲ中ニ(モシ)字ヲ記

ス、人名カ、総シテ仏家、人没シテ三年忌ニ逮ブ間十三仏ヲ配当ス、ソノ中初七日ヲ不動トシ、三七日ハ文殊ナリ、然レバ悲母ノ三七日ニ斯ノ像ヲ画ク者由シアル也、唯ク其人今不レ詳カ、

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑雑 画図 真物」)

●四條河原繪巻物 正筆

一軸

コノ画軸ハ、嚮ニ阪貞年ノ手ニ得、モト多田宗雅醫師ノ所レ藏ルナリシト、所レ図ル昔年芝居歌舞伎ノ体、屋作り、人物、**ガクヤ**宴會ノサマ、画末ニ偶勝芝居ノ体アリ、最モソノ時ヲ知ルニ足レリ、可シレ珍トス。○画軸ノ匣中京伝ノ洞窟ニ復スル書アリ、曰、奇キ

画卷拝見、如レ仰ノ師宣風ニテ、少シ筆重キ所候様見ヘドモ、芝居舞台ノ様子ナド、延宝天和貞享ノ時代ト見エ候、ヤハリ師宣ニ候半、右ノ時代是程ニ画ク者別ニハ有間敷、師房ハ今少シ下リ可ク申哉、愚眼ニハ定メカネ候、師宣ヲ去ルコト遠カル間敷存候、洞窟ハ秋田候ノ画臣鑑識ニ名アリ、京伝ハ俳人稗史ニ高名ナリ、○本書ノ軸末奥書アリ、云ク此一軸者、明暦三丁酉ノ歳猿若勘三郎与レ倅共ニ到ニ上京ニ、無キニ上モ御方様ヨリ、倅ニ明石ト云フ名、並ニ衣装束等賜リ、於ニ四條河原ニ芝居興行之図、土佐氏画也、至ニ後代猿若家之可キレ為ニ規模ニ者也、于時明暦三丁酉歳文月、」本書ヲ觀ルニ、年月ヲ記スト雖ドモ筆蹟全ク後人ノ所レ書ルナリ、是レ其ノ年代ノ言伝ヲ追記セシ者ナリ、

都名所図会云、芝居ハ四條鴨川ノ東ニ在リ、永禄年中ニ江州ノ浪人名古屋三閤ト云フ者、歌舞伎ト名ヅケテ男女立合ノ狂言ヲ仕組、北野ノ森祇園ノ南林、或ハ五条河原橋ノ南ニテ興行シケルニ、秀吉公伏見ノ城ヨリ上洛シ給フトキ、見物群集シ妨ニ及ブ、

故ニ四条ノ河原ニ移ス。其後中絶アリシ所ニ、承応二年村山又兵衛ト云フ者、四条河原ノ中嶋ニテ再興シ。又縄手四条ノ北ニ移シ、遂ニ寛文年中今ノ地ニ遷シテ常芝居トナル。」以上ノ文ニ拠レバ、

猿若ハ承応ニ村山再興ノ後寛文常芝居トナルノ間、於河原ニ興行セシコト知ルベシ。○画院住吉内記ガ云、四条河原巻物得ト見勘考仕候所、画者全ク菱川師宣筆ニテ可レ有ル存候、奥書トハ相違可レ

仕候、奥書ニモ愚案ニハ分リ兼候コトモ有レ之候。」コノ相違トハ、奥書ニ土佐氏ト云シノ非シ云フ。愚案分リ兼候ト云シハ、已ニ

予ガ所ニフツト同シキ也。○浮世絵類孝ニ云、菱川師宣入道友竹ハ房州平郡ノ人、若年ノ時江戸ニ移居シ、正徳年中没ス。享年七十余ト、

以レ是算スレバ、猿若ノ上京セシ頃ハ年已ニ長ゼリ。又延宝天貞ノ頃ハ猶更壯強ノ時ナレバ、前説皆協フ。然レバ以ニ師宣コノ絵ノ

定ト為ベシ、亦古昔ノ風俗観ルベキ者茲ニ存セリ。○又画中戲場ノ看牌ヲ出ス、今ト異リ、是モ亦昔シ見ルベシ。●和国花車●霜夜の

物語●太平大躍●公平六條かよひ●六條の沙汰

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑雑 画図 真物」)

●墨畫葡萄 無シ二名識一、紙傍ニ有三印一、 一幅

一ハ香爐形、栗村朱字、一ハ方形、李齊賢印朱文、一ハ方計仲思白文○右ハ文政乙酉ノ夏、京師ノ人古書画数品ヲ齎シ来テ予ニ示ス、

予此画ノ写意真精ナルヲ愛シテ遇チ購蔵ス。然レドモ画者ヲ審ニセズ、或曰宴席ニシテ、画家板谷桂舟住吉内記狩野洞益ニ出シ示

ス、益ガ曰、漢畫ニ非ジト、住吉モ亦曰然カラン、舟ハ卒然ト起テ曰ク、我が流ニ非ズ、又漢画ニ非ズ、予乃詰テ曰ク、土佐ハ和画

ナリ、然ルヲ和二非ズ漢ニ非ズトセバ、是レ何ノ画ゾ、舟ガ曰、漢

ニ非ザルハ論ズルコトナシ、我ガ流ニ非ズトハ、土佐ノ外真相蛇足周文ノ類、自ラ和ノ一派、因テ云爾フ内記モ亦傍ニ在テ同意ト云フ、予復印体ヲ視ルニ、和二非ズ、再ビ疑フ、因テ一日梅塙ニ問、

フ塙ガ曰ク、画史ニ云、李忻、能ク画ク鍾馗ノ像ヲ、画法出タリ周文ヨリ、而シテ長ゼリニ於大像ニ、コノ李忻ハ朝鮮ノ人ト云フ、画史

其次ニ云フ、完山、善ク画ク彩色ノ狗子ヲ、学デ宋ノ毛益ヲ、而最モ佳ナリ矣。」同書又印譜ニ云ク、完山、靜仲、画上手ト、而花押ヲ

記ス、其体朝鮮ノ押字ニ似タリ、梅塙又曰、世ニ名画考ト題セル写本アリ、撰者ヲ許ニセズ、云ク、其善ク葡萄ヲ画ク、墨画多シ、

朝鮮ノ人、帰化シテ画ヲ業トス、完山ノ人、別ニ号ス醉竹禪又梅隱ト、予未ダ此書ヲ見ズ、因テ考ルニ、画史ニ完山ト出セシ者ハ斯

人ニシテ、朝鮮ノ産ヲ以テ李忻ト並ベ挙シナリ、又前ノ三印ノ文ニ拠テ思フニ、斯人モ亦李姓、名ハ齋賢、字ハ仲思、栗村ハ号ナラ

ン、論語ノ見レ賢ヲ思フレ齋カラシマニ取ル、然レバ画史ノ靜思トアルモノノ字乎、又三韓紀略ヲ見ルニ、族望略ニ云、朝鮮ノ四十五氏、

備齋叢話ニ曰ク、朝鮮ノ書古人皆重シズ巨族ヲ、如キ普ノ王謝、唐ノ崔盧一是レ已、我カ国ノ鉅族ハ、皆自リ三州郡ノ土姓ニ而シテ出ツ、昔ハ盛シニ而

今ハ衰ヘ、昔ハ微ニシテ而今ハ盛ナル者、並ニ録スレ之ヲト記シテ、次ニ李氏ハ德水、仁川、龍駒、陽城、広州、韓山、全義、慶州、金海、

完山、星州、延安ト挙グ、德水以下ハ州郡ノ土名ナリ、左レバ名画考ニ、完山ノ人ト云ヒシモ是ト符ス、又時世ヲ考ルニ、画史ニ、

李忻ノ画法出ツ於周文ニト云ヲ以テスレバ、同書ニ、蛇足ハ師トスニ周文ヲ、嘗テ与ニ純一休一有ニ師檀之縁ニト云フ、一休ノ生没応

永文明之間ナレバ、至テ今四百年ノ下三百十余年ノ上ト為スベシ、然レバコノ完山ノ葡萄蓋シ此頃ナルベシ、古画トスベシ、又

此画ノ徵証トスベキハ、画紙ノ品鮮紙トスベク、印様中華ニ非ズ自ラ鮮國ノ体ナリ、又墨画ノ筆色モ亦彼邦ノ態アリ、且ツ画家ノ輩ノ周文蛇足ト比鑑セシモ、前考ニ拠リ其帰化ノ時ヲ以テ觀レバ、彼是思ヒ合スベシ、然レバ是レ鮮國完山人李斎賢ノ所レ画クト定テ、違フコト無キ耳、

又完山帰化ノ時代ヲ其本国ニ考ルニ、明ノ永樂成化ノ間ニシテ、鮮國ハ太宗成宗ナドノ時ナリ、若クハ事有テ吾邦ニ流離セシモ計ルベカラズ、

又或人曰ク、嘗テ養伊二川ノ中カ、釈迦ノ像ノ鑑記ヲ出セシニ、完山静中ト記ルセシト、然レバ彼ノ画家ニモ、斯人ハ所レ識ルアリテ然スル者ナリ、

(『新增書目 内篇 卷七』上「雜雜 画図 真物」)

●氣違草紙 享和壬戌首夏因土佐内記廣行所藏之本模写原本亦模本也 一軸

氣違トハ喪心ナリ、画者ヲ、不レ聞、其図中、始ニ土佐内記トアリ、書体古シ、押「黑印」、文忠俊、図ノ始ハ、僧ノ放火テ自ラ其屋ヲ焼サマ、次ハ、火延焼シテ、衆人擾乱ノサマアリ、此中、男女陰処ヲ露ス者ヲ画ク、可レ咲、其次ハ、一婦偏袒キ、一老姥ノ奔ヲ拘フ、一僧コレヲ沮ルサマ、与ニ陰処ヲ露ス、又、一僧自小刀ヲ抽テ其頂上ヲ斬、次ハ、二丈夫刀槍ヲ以戦フ、執レ槍者ハ裸体ニシテ陰具全ク露レ、立ナガラ溺スルサマ、次ハ、衆僧群居シ、草ヲ煮テ食スルサマ、次ハ、僧、狂ヲ發シ、仏像ヲ庭ニ投ケ、経卷ヲ裂毀リ、法鼓ヲ撃テ舞踊リ、水瓶ヲ空中ニ投ケアグルサマ、又、一僧ノ伏タルニ、大槽ヲ覆ントスルサマ、偏袒ノ狂僧ヲ扶行サマニ終ル、其末ニ、一小人桶ヲ荷フサマ、三狗ト、弄猴人ト、化飯ノ僧アリ、其図完カ

ラズ、是模倣ノ人ノ抄写ナリ、図末二年号ヲ記ス、云、慶安元年、コレ原本ヲ模写セシ時ノ記ナリ、距レ今百五十年、亦古シ、書レ名、忠俊、印記アリ、同レ始、按、好古小録云、狂僧草子一卷、画光信、然トキハ、既三百有余年ノ画ナリ、今原本ノ所レ在ヲ不レ知、可レ恨、コレ本草綱目ノ、木菌ヲ食バ令ト人笑不レ止、地草ハ、中ニ其毒ニ者必笑不レ止ト云ルノ画伝ニシテ、其要鮮顔ノ笑具ナリ、癸亥春識

(『新增書目 内篇 卷七』上「雜二 画図ノ中之部 写」)

●蜘蛛繪卷物 片桐侯家藏○享和元年辛酉主膳正貞彰応余需写以贈之 一軸

貞彰曰、図古土佐之所レ画、詞吉田兼好之所レ書、嘗因「徳廟」之命「具」台覽、今藏「其封村和州小泉之庫」、

○此卷ノ次第八、源賴光朝臣、其随從綱公ト、某年十月ノ下旬ニ、北山ノ辺蓮台野ニ抵リ、一ノ髑髏ノ空ヲ飛ヲ見ル、後ツヒニ随レ風入ニ雲中ニ、因覓テ神樂岡ト云ニ到リ、一ツノ魔第二至ル、賴光其第二入り、数端ノ妖物ニ逢ヒ、思ニ、此間欠脱アラン、画及詞書、其次第ヲ為サズ、又一婦人ニ逢フ、是モ亦妖物ニシテ、賴光ニ斬ラレ逃去シヲ、尋ユキテ、西山ノ洞中ニ至リ、卒ニ綱公ト俱ニ巨螳螂ノ変化セシヲ殺シ、及小螳螂數十ヲ斬、遂ニ彼魔第ヲ焚、其事帝ニ聞エ、御感アリテ、賴光朝臣ハ、摂津守正下ノ四位ニ任叙シ、綱公ハ、丹波国ヲ給ハリ、正下ノ五位ニ為サレシト云ニ終、コレ皆忍言ニシテ、玩具ノ為ニセシ也、日本史曰、賴光事蹟不止於此、如殺鬼同丸斬土蜘蛛、誅酒吞童子之類、在稗業雜説、真偽難弁、今不取、○余此図ノ画者ヲ住吉廣行ニ問ニ、彼カ所レ伝フ言ハ、土佐長隆ノ所レ画ト云、然トモ廣行ノ父内記親ク其図ヲ觀タルニ、

越前守光顕ノ所レ画ナル当ト云リ、廣行ハイマタ此原本ハ不レ視トナリ、又時世ヲ問ニ、長隆ノ父某、某ノ父光顕、光顕ノ父光秀ト云、光顕元徳ノ頃、長隆文和ノ頃ト書ヌレバ、元徳文和ノ際、僅ニ二十四年ト雖、徒然草ノ注ニ、兼好以ニ北朝感応元年ニ死、年六十八ト云バ兼好既文和ニ先テ没テ、長隆ノ画ルニ詞書スルノ理ナシ、然レバ内記ノ所レ云、光顕ト為者、其实ヲ得タル欤、イヅレモ四百五十年上ノ画、可ニ珍重ニ、且宜下拠レ図觀中當時上モノ也、享和癸亥閏正月識于江都南室

(『新增書目 内篇 卷七』上「雜二 画図ノ中之部 模写」)

●十界圖

是原來迎寺ノ所藏ト云、來迎寺ハ近江国ナル可シ、三才図繪ニ、近江国中村ニ來迎院アリ、蓋此処、此図板谷桂意ノ所藏ニシテ、其粉本ナリ、余乃需レ彼模写セシメ、以襲藏ス、其図十五幅アリ、今全ク難レ求カ故ニ、随レ成テ収之、文化乙丑冬十一月記ス其目

- ・第一 閻魔社界 一幅已得
- ・第二 等括地獄 一幅已得
- ・第三 黒繩地獄 一幅已得
- ・第四 衆合地獄 一幅已得
- ・第五 無間地獄 一幅已得
- ・第六 餓鬼道 一幅已得
- ・第七 畜生道 一幅已得
- ・第八 阿修羅道 一幅已得
- ・第九 無常 一幅已得
- ・第十 初四苦 一幅已得

- ・第十一 後四苦 一幅已得
- ・第十二 九相 一幅已得
- ・第十三 殺父業因 一幅已得
- ・第十四 念仏往生 一幅已得
- ・第十五 天道 一幅已得

貞幹好古小録云、來迎寺所藏十界図、伝云、凡三十幅、今存者十五幅、僧慧心ノ結構ニシテ、巨勢金岡所図ト云、道風真蹟ノ和漢朗詠集ト伯仲ス、蓋慧心ハ是ニシテ、金岡ハ非也、此図中古製考フベキコト多シ、一拠之トキハ桂意ノ所藏ノ者ハ、佚存ノ全キ者ト為ス、又桂意曰、此図ハ往生要集ヲ以テ所レ画ト、余乃彼書ヲ閱ルニ、其図中ニ所押ノ色紙形ニ所題ノ文、及画中各処ニ小書スル者、総テ往生要集ニ所レ記ノ文ナリ、然トキハ板氏ニ所レ傳ノ言可レ取、又曰、其図ハ、彼方遠祖右近衛將監行秀ノ所レ画ト、因テ桂意ノ所傳土佐氏ノ略系、及永納ノ画史ヲ考ルニ、永春光國隆光寂濟行広行秀六人ハ、俱ニ嵯峨融通念佛縁記ノ筆者ナルコトヲ云ヒ、而略系ニ永春ハ後小松帝ノ頃ノ人、行広ハ永享二年大嘗会屏風ノ筆者ト記ス、然トキハ六人其時ヲ同フス、且往生要集ハ恵心僧都源信ノ所著、慧心、当作恵心、小録誤ル、又彼集ノ注云、恵心寛仁元年六月十日寂、年七十六、是後一条帝ノ時ニシテ、永享ノ頃ヲ距コト已ニ四百余年、然ハ恵心ノ所レ述ノ言ニ因テ、後其図ヲ作ル者ナリ、金岡ハ、日本史ニ依ニ、元慶四年釈尊ノ図ヲ画クコトヲ載ス、因テ恵心ノ寂年ヲ以逆算スルニ、恵心生ルニ先ツコト、大抵六十年、然レハ其事無ニ非レトモ、正シク其筆者ヲ伝ルトキハ、小録ニ金岡ハ非也ト云者取ヘシ、又慧心ハ是ト云者ハ、其言不通、事ハ前言ノ如シ、又中古ノ製考フベキコト多シト云者、

実ニ然リ。地獄天道ハ皆空想ノ観ニシテ、徒其筆力ノ精妙、画図ノ奇態ヲ翫ノミ、其間人事ノ常体ヲ描ニ及テ、動靜進退、衣飾器械、居家山沢、鳥獸草木ニ至テ、皆是當時ノ現在、正シク其今ナル者ニシテ、其製其事、可ク知レ可シ、可ク考コト多シト云者信也。

（『新增書目 内篇 卷七』上「雜二 画図ノ中之部 模写」）

●古春畫

本下主計頭俊懋所藏享和辛酉冬模写

一軸

此画、詞書アルニ因テ観レバ、隨身ナル者ノ、齋宮ノ女ヲ奸スル図也。詞、固ヨリ姪辞ノミ、然トモ、画辞両ラ古雅、最可珍。此卷、一曰住吉廣行ニ問ニ、曰、是灌頂ノ卷ト名ケテ、世ニ名高キ画也、画ハ住吉法眼慶忍ノ筆、即某ノ元祖、名人也、此図ハ則正筆、世ノ可ニ貴重者也、然ドモ、其画体不レ正方故ニ、從ニ愛玩ノ為ニ奇重ス、可レ恨也、今復慶忍ノ時世ニシテ、如レ斯繪ケル者、曾伝者罕ナリ、実ニ名物也ト、予因俊懋ニ告、俊懋曰、名物如レ斯ヲ不レ知、歷年空ク庫中ニ納ム、自レ今可ニ襲藏ニ乃大喜、此図、予模レ之ニ及デ、其工ヲ省ガ為ニ、最初ニ段ハ、墨彩共ニ真写シテ、其後ハ、墨画ノミ真レ之シ、彩ハ其色ノミヲ抄写シテ、

非レ真、又、卷尾ニ記テ曰、詞書五段、後京極攝政良經公之御筆也、思フニ、古筆家ノ鑑定ナル可シ、然トキハ名物ナリ、又、詞書ノ終ノ文ニ曰、此事世ニ泄レ聞エケル故ニ、寛和二年六月十九日ニ、伊勢ノ御下リ停リテ野宮ヨリ還ラセ給ニケリ、按ルニ、寛和二年ハ、花山帝ノ二年、丙戌ノ年也、蓋是、名ヲ託ル所アル歟、○画史云、良經公、九條兼実公之子也、奉三仕土御門院、攝政於時、歲三十八薨、其和歌也、英逸不レ可言矣、詩亦奇、及

書法、當時三跡之一成、吟詠之暇、好圖馬形、丹青諸家、皆服其妙、○慶忍、土佐氏系譜、作慶恩、稱住吉法眼、小字聖寿丸、後白河土御門朝之人、父隆兼、祖父經隆、從五位下土佐權守、画史云、藤原經隆、為三繪所、土佐氏元祖也。

（『新增書目 内篇 卷七』上「雜二 画図ノ中之部 模写」）

●本筆三十六歌仙

越前守光顯筆

一軸

此図住吉内記廣行ノ粉本ニ就テ模ス、即廣行ニ乞テ其所レ画ナリ、其図ノ奇巧ヲ悦バシム、木筆並此画ノ說、柴彦輔ノ序文ニ詳ナリ、左ニ記ス、歌仙ノ像毎ニ、其上色紙形ヲ画ク、其様亦奇趣、卷末ニ華表ヲ画ク、傍ニ松樹アリ、其上ニ住吉ノ神詠ヲ書ス、蓋住吉之杜ナリ、○序、住吉画博廣行、手模下木筆画三十六歌仙一図一卷上、原本水戸府秘藏也、廣行審定、為其先越前守光顯真蹟、筆力矯健、變化自在、実妙跡也、按東觀余論曰、唐太宗飛白、皆用相思、為一片板、若髹刷、然呼為木筆、本朝画伝載下根来寺覺賢及賢正智海等木筆善梵書、自作不動及渡唐天神像一事上、又住吉氏家乘云、其先刑部光信、嘗応源大將軍東山公命、木筆画野馬、又其家訣、木筆以木槿造云、扨此数說、則木筆本出、自飛白書、僧家以下其便作梵篆、取而用之、其余巧變為墨技、遂流入画家、成一体也、今レ世久絶其技、雖以三躋官子弟如土佐住吉諸家、但伝其訣、而不レ能藏古蹟粉本也、廣行一曰、觀此本、大驚以為奇近、費数十日工模取、筆ニ必慎、毫髮無所レ失、其可下与二原本一弁上者、独紙墨新陳耳、亦精絶也、寛政乙卯季秋東讀柴邦彦題、○廣行曰、光顯ハ元徳ノ頃ノ人、事蹟土蜘蛛絵卷物ノ条ニ記ス、元徳ハ後醍醐帝ノ年

号、元弘ノ前年、

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑二 画図ノ中之部 模写」)

●鳥羽僧正戯畫 模写

二枚

コレ福山侯阿部閣老ノ正精朝臣所レ藏ナリ。予一日其別業ニ集飲セシ時、壁上掛クルレ之ヲ視ル。乃借写ヲ請フ。侯許与ス。因狩野洞益ニ憑テ之ヲ真写ス。原コレ画軸ノ草本ト覚シク。今大小二幅ト為スト雖トモ、其尺寸相同シ。大幅ナル者ハ、豎九寸八步、横三尺九寸八步ナリ。小幅ナル者ハ、豎九寸七步、横一尺八寸四步ナリ。其画ノ粗ヲ拳ケンニ、大幅ハ、画ノ中間ニ、猿猴ハ騎レ鹿兎ハ騎レ狐ニ、相ヒ争ヒ、所レ謂競馬ノ状ナリ。其前ニ、猴ト兎ト俱ニ鹿狐ニ乗シ、馳ント為テ屯スル者アリ。画後ニハ、觀レ之ヲ者ヲ画ク。體アリ、鵝鵲アリ、蝦蟇アリ、老狐アリ、家鷺アリ、俱ニ見レ物ヲ人ノ状アリ。其奇態百出。毎ニ驚シ眼ヲ惹ク堪ヘタリ。総シテ墨画ニシテ、其下原野秋草ノサマヲ図セリ。又小幅ハ、一ノ猴乗リ鹿ニテ墜馬シ、折レ骨ヲテ痛苦ノ状アリ。兎及猴コレヲ扶抱シ、又所レ乗ルノ鹿、逸脱奔去ノ体アリ。一猴遂レ之ヲ、疾行ノ状ヲ画ク。戲筆実ニ棒腹感嘆ス。画史ニ云ク、鳥羽僧正、諱覺猷、源隆国子、為ニ天台座主、法務、及三井ノ長吏、大僧正ト、又能ス二画ヲ、曾住ニ醍醐ニ、又居ルニ鳥羽ニ、故号スニ鳥羽僧正ト、專ラ為ニ倭画ヲ、善シテ人物ヲ自ニ成スニ一家ヲ、惟画クニ戲事ヲ、写テ意ヲ不レ求メ形似ヲ、曾テ東寺之供米、俵子ノ内不レ充タ、是レ監吏之奸曲也。覺猷戲ニ画ニ俵子飄ル風ニ之ヲ、以諷スレ之、則達ニ上聞ニ、如クレ法ヲ納メシムレ之、監吏亦恥スレ之、又画ニ馬形ヲ一極ニ其妙ヲ、日本史ノ列伝ニ、隆国ハ承暦元年薨ト見ユレバ、承暦ハ白河ノ朝ニシテ、

至ニ今文政二年ニ、七百四十三年、然レバ僧正モ此頃ナレバ最モ古代ノ筆ナリ。又馬形極ム其妙ヲト有ルハ、此戲画ノ中、狐鹿馳奔ノ状、託ニ其真トニ迫レリ。又措置ノ間、此画ヲ、住吉廣尚ニ示スニ、後贈レ書ヲテ曰ク、其節拝見ノ、覺猷僧正正筆ノ掛幅、誠ニ以テ無類ノ筆跡、拝見侯サヘ難キレ有リコトニ覺フト、如キレストキハ福山侯ノ珍藏ナリ。又原幅外箱ノ銘ニ、鳥羽僧正画横物ノ七字アリ。思フニ小堀遠州ノ輩ノ所レ書ル乎。

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑二 画図ノ中之部 模写」)

●清水寺画榜大名列之圖

一軸

榜横三丈豎五尺有レ縁地総金。○此図、往年京ノ清水寺ノ堂ニ掛レ之ヲコトヲ聞ク。乃京師ノ人ヲ令シテ、就レ之ニテ模写セシム。而既ニ染歳堂ニ藏シテ、且其目及弁説ヲ藏書ノ簿ニ載ス。京師相傳フ浮世又兵衛ノ所レ画クト、今此ノ是非ヲ論ゼザレドモ、將軍家御入国ノ後ノ、古態風俗挹テニ此絵ニ可シレ見ツ。又画榜ニ書ス。承應四年乙未四月、至レ今ニ一百六十六年、殆ト古シ。又此図嚮ニ江戸ニ携ヘ来テ座右ニ置ク。一時出シテ示スニ林祭酒ニ、林氏歎テ曰ク、是古人ノ風態可シレ見ツ。甚賞シ且乞フニ借寫ヲ、予諾ス。林氏令シテ畫家板屋桂舟一模写シ而返ス。然ルニ戊寅ノ災ニ子ガ本焼亡ス。子因テ復乞フニ林氏ノ模本ヲ、還テ再模スレ之ヲ。今ノ本ハ即是ナリ。初メ京師ノ人就ニ原図ニ写ス。其筆法不レ異レ真ニ、而再林氏ニ模ルモノ稍ク殊リ。三写シテ今藏ルモノハ又稍ク其筆意ヲ失フ。可レシ恨ム。三写ノ者ハ舟ガ弟板屋伊三郎ガ筆ナリ。

(『新增書目 内篇 卷七』上「雑二 画図ノ中之部 模写」)

●狐の草子 絵詞

一軸

コレ住吉画院ノ粉本ニ因テ模写ス。原本土佐氏古代ノ絵ナリ。軸末ニ記ス。土佐光信朝臣ノ筆。如慶廣通極メ。具慶廣澄極メト。又云々。此本図ハ者。如慶以来。先祖代々之宝藏也。住吉画所ト。然レバ今。住吉廣尚ガ家伝ノモノ也。○又表紙ニ記ス。画ハ土佐刑部大輔光信。詞ハ飛鳥井殿ト。飛鳥井何卿ナルヤ不スレ詳カ。○画史ニ云ク光信ハ明応五年ニ任ス刑部大輔ニト。挾レ之ニテ知譜記ヲ按ルニ。彼ノ家ノ権大納言雅俊卿ハ。大永三年薨ス。年六十二ト云ヘバ。コレ寛正三年ノ生レニシテ。明応五年三十五歳ナリ。若シクハ斯ノ卿歟。予ガ本ハ其筆ト画ハ模スルニ及バズ。タゞ文章ノミ写ツセリ。○コノ絵詞ノ大率ハ。或ル僧都ノ住ル庵ニ飛鳥ト云ル婢ノ来リ。或ル女房ノ消息ヲ通ジ。遂ニ八葉車ヲ迎ニコシテ。彼僧女ノ家ニ抵リ。主婦ノ美艶ニシテ且饗シウケ。歛樂シテ思ハズ数日ヲ経シ間ニ。或ル地藏菩薩ノ靈験アリテ。女輩皆狐ト変ジ逃ウセ。僧都ハ茫然ト醒テ見ルニ。金剛乘院ノ大床ノ下ニ居タリ。錦繡ト覚ヘシハ是レ穢汚ノ物ナリ。因テ高匚ニ匍テ南ノ大門ニ出テ小児ノ笑ヒ者ト為ラレシヲ。近衛殿ノ侍見テ。年頃相識レル人ナレバコレヲ憐ミ。着タル直垂ノ上ヲ脱デ着セ庵ニ還ヘレリ。七年ノ樂モ七日中ニテゾ有ケルト見ユ。

(『新增書目 内篇 卷七』上「雜二 画図ノ中之部 模写」)

●羅競 一日勝絵

一軸

此画軸ハ。嘗テ津輕越中守信寧ノ所蔵ヲ借写ス。而平戸ノ庫中ニ蔵ム。後復平戸ノ本ヲ再模シテ江都ノ邸ニ蔵ム。再々伝写シテ稍ク原容ニ違フ。恨ムベシ。既ニ蔵書簿ニ記ス。曰。凡ソ画軸者。率皆

為ニ翫覽ノ一設ク。故ニ其首必ス有ニ題字一。此卷称ルニ羅競ト一者。即

是也。俗ニ謂テ二男陰ヲ一曰フレ羅ト。競トハ也者。較ルニ之カ大ニ之謂

ヒ。而其所レ図ル。奇態百出。殆ト使ム下ニ觀者。絶倒セ上其末又画クニ放

屁闘争之状ヲ。詭怪不スレ可ラ言フ。実ニ戲虐之甚シキ者也。然トモ其

規模之快闊ナル。与ニ筆態之縱横一。自リハ非ルニ右名手ニ。不ズレ能

レ至ルコトニ此極ニ。顧ルニ当ニ古土佐若クハ鳥羽ノ僧正ノ所ナル一レ画ク

耳。世ノ鑑ルニ古画ヲ一者熟ニ視セバ。此図一。則其於ニ家之画一頗有シ

ニ裨益スル一乎。是予カ所下以ニ写ニ藏シテ之ニ不ル中敢テ放棄セ上也。但此

猥物。使シテニレバ下好事一觀セ上則可ナリ。若クハ誤テ披ニ展セハ於高貴之前

一。毋ニ乃失ルコト一レ敬ヲ乎。可シ慎ム。寛政丁巳ノ仲春初三。雪舟小

白識ス。

好古小録ニ云。勝画ニ卷二。画僧ノ覺融。東寺金勝院ノ所蔵ニシ

テ。今伝フル所ヲシラズ。一茲ニ二卷ト云フ者ハ。陰臺ヲ競ルト。

放屁ヲ以テ闘争フト。分テ二ツトス。覺融ハ。鳥羽ノ僧正ノ名。

住吉廣尚内記曰ク。勝絵卷物ハ。原本官庫ニアリト云伝フ。還テ

津輕侯ノ所蔵ハ何物ニヤ。云伝モ無シト。一スレバ津輕ノ蔵ハ真

本ニハ非ズシテ。以前ノ写本ナルベシ。廣尚又曰。コノ軸鳥羽僧

正ト云伝レドモ。基光ノ筆ニテアル当シト。父廣行語レリト。又

曰。羅競勝絵モト同本。好古小録ニ勝絵ニ卷トアル者ハ。勝絵ノ

中。末ハ放屁ノ絵ナレバ二卷ニ分チタル者乎。住吉家蔵ノ本ハ。

寛文頃ノ写ニシテ一卷トスト。然レバ予ガ所蔵ハ古本ノ伝模ニシ

テ。小録ノ所レ云ハ別ニ一本トス。○土佐氏系譜ヲ按ルニ云。基

光ハ土佐氏ノ祖。初ハ盛光。内匠頭任ニ越前守一。白河院ノ頃。子

隆能。預ニ絵所一主殿頭。子隆親。預ニ絵所一。從四位下中務太輔。

元永ノ頃歟。

〔『新增書目 内篇 卷七』上「雑二 画図ノ中之部 模写」〕

●異疾圖

模本

一軸

右卷末云、土佐中務大輔隆親筆、此本、官医多紀安長、土佐板谷慶意ノ本ヲ模写セシヲ、予又コレヲ彩写ス、○詞書アリ、図十七條、

●侏儒●脊ムシ●白子●鼻黒●男女一身ニシテ男女ノ茎戸ヲ具ス●腎穴

無クシテ口ヨリ糞ヲ吐ク●口臭●霍乱●腎口トモニ吐瀉ス●陰毛虫

●肛門数穴アリ●眼ニ鍼ス●歯揺動●二舌●睡病●瞳揺●面瘰

不睡病○土佐系図ニ拠ニ、隆親ハ、鳥羽ノ朝、元永ノ人、元永元

年ヨリ、天保六年至テ、七百十八年、

〔『新增書目 内篇 卷七』上「雑二 画図ノ中之部 模写」〕

●辨才天像 墨本

一幅

此像、文化六年ノ夏、余増上寺ニ詣ノ途、坊間ニシテ、路店ニ故器ヲ鬻ク者アリ、余自ニ轎中ニ之ヲ視ルニ、羣器ノ中此一幅ヲ掛ク、

余怪ム、因テ其所レ出ヲ問ヒ、且買来ラシム、売者ノ曰、是弁財天ノ像ナリ、此春、相ノ江島弁財天ノ祠、開扉ノ事アリ、此時ニ当

テ、某ナル者此図ヲ模搨シ、普ク世ニ弘ム、蓋弁財天ノ利益ヲ、衆

人ニ施サンガ為也、余乃能ク其図ヲ視ニ、其像、婦女身ニシテ、左

手ニ宝珠ヲ掌ニシ、右手ニ劍ヲ持、上辺ニ火炎ヲ画ク、風ヲ帶ル勢

アリ、半身海波ノ上ニ出、下身ハ波底ニアリテ、腹尾スベテ蛇形ナ

リ、其像模本ナルガ故ニ、草画ノ精廉ハ不レ可レ知ト雖ドモ、所レ図

異容ナリ、且其上ニ記テ曰、巨勢大納言金岡筆、文化己巳春三月己

巳、幕動上レ石、余因テ再其所ヲ尋テ、原図ノ出所ト、幕動ノ人ト

ヲ問ハ使ルニ、復之ニ不レ遇、故ニ今其委ニ及コトヲ不レ得、因テ

官ノ画工、住吉廣行、板谷廣長ニ就テ、斯像ノコトヲ質スニ、共

ニ曰、金岡ノ所レ画、世ニ所レ有罕也、而未此図アルコトヲ不レ聞、

且波文ヲ描ク、筆法金岡ノ趣ニ非ズ、又画様ヲ以テ、時代ヲ論ズ

レバ、良金岡ヨリ下レリ、余思フ、然トキハ疑ヒ無キコト不レ能、

金岡ハ古ノ妙手、世ニ所有、大底画家ノ無レ不レ知、恐ハコレ偽造

ニシテ、託レ名者歟、今其出所来由ヲ審ニ為ズ、姑其コトヲ記テ俟

ニ来者、又按、鎌倉志云、江島ハ、金龜山与願寺ト号ス、陸ヨリ

島ノ入口マデ、十一町四十間許アリ、中略此島ノ開基ハ、役行者、

次ニ泰澄、次ニ道智、次ニ弘法、後ニ文覚再興アリシト也、縁起

アリ、中略、欽明天皇十三年、四月、大地震動シテ、天女雲上ニ

アラハル、其後海上ニ忽一島ヲナセリ、是ヲ江島ト云フ、十二ノ

鷗、島ノ上ニ降ル、故ニ鷗来島トモ云フ、此島ノ上ニ天女降リ

居給ヘリ、遂ニ惡龍ト夫婦トナレリ、此前文、此島ニ於テ、景行帝ノ御

時、竜ノ暴惡熾ナリシ事ヨリ、安康武烈ノ朝ニ至テ、竜鬼ノ暴惡、五頭ノ竜、人ニ害

アリシ事ヲ云フ、太平記ニ、北條時政、江島ニ参籠シテ、子孫ノ繁昌

ヲ祈ケリ、三七日ニ当ケル夜、赤袴ニ柳裏ノ衣著タル女房ノ、端

嚴美麗ナルガ、忽然トシテ時政ガ前ニ来テ告テ云ク、汝ガ前生ハ

箱根ノ法師ナリ、六十六部ノ法華經ヲ書写シテ、六十六箇箇ノ靈

地ニ奉納シタリシ善根ニ依テ、再此土ニ生ル事ヲ得タリ、去ハ子

孫永々日本ノ主ト成テ、榮花ニホコルベシ、但シ挙動違所アラバ、

七代ヲ不レ可レ過、吾ガ所レ言不審アラバ、国国ニ納メシ所ノ靈地

ヲ見ヨト云捨テ歸リ給フ、其姿ヲ見レバ、サシモ嚴カリシ女房、忽

伏タル長二十丈計ノ大蛇ト成テ海中ニ入ニケリ、其跡ヲ見ルニ大

ナル鱗ヲ三ツ落セリ、時政所願成就シヌト喜デ、則彼鱗ヲ取テ旗

ノ紋ニゾ押タリケル、今ノ三鱗形ノ紋是ナリ、其後弁財天ノ御示

現ニ任セテ、国ノ靈地ヘ人ヲ遣テ、法華經奉納ノ所ヲ見セケル
ニ、俗名ノ時政ヲ法師ノ名ニ替テ、奉納筒ノ上ニ、大法師時政ト
書タルコソ不思議ナレトアリ、下略」捫レ之バ、金岡ノ所レ画カ、或
ハ後人ノ所レ図カ、神像ノ所起以レ茲ナルベシ、

(『新增書目 内篇 卷七下』「雑雑之部 画図之中 仏像」)

●吒枳尼天神像 巨勢有重筆摸本

一幅

此神像ハ吾家傳ナリ、先年清若冠ノ頃、久昌夫人語テ曰、此神像
ハ、嘗法印公ノ時、朝鮮ノ役ニ隨ヘ往玉ヒ、於三軍中ニシバ、靈驗
アリト云、此時清未タ能ク事ヲ弁ゼズ、然ドモ尊崇、之ヲ平戸ノ齋
中ニ藏ム、後江戸ニ退隱スルニ及デ、往事ヲ追念スルノ中、此像
ノ古色、神彩不_レ常ナラヲ思ヒ、胸間頻ニ之ヲ視ンコトヲ懷フ、因
テ熙ニ言テ、神像ヲ江戸ニ遣ラシム、像至ル、展テ而視レ之ニ、色
彩ノ古キ、先年ノ所レ見ニ陪ス、然レドモ画者誰トカスル、予ガ目
力ノ不_レ所_レ及、因画家住吉廣行ニ請テ之ヲ鑑セシム、廣行則作
鑑記ニ答フ、云、吒枳尼天之影、巨勢有重真筆無_レ疑者也、文政七
庚午年正月廿一日、住吉内記廣行、」於茲画者定ルコトヲ得、案

ルニ此有重ハ、板谷氏ノ家伝ニ、巨勢有重嘉曆ノ頃ト記テ、次ニ
有久有重アリ、其下ニ有重文和ノ頃ト記ス、且云、有久有重、父
子乎、兄弟乎、不_レ審_レ之、時代ハ如_レ斯ト、嘉曆元年ハ、丙寅
ニシテ、後醍醐帝ノ八年也、文和元年ハ、壬辰ニシテ、北朝ノ後
光嚴ノ元年、南朝後村上ノ正平七年ナリ、捫レ之テ考ルニ、此像法
印公ノ時ニ有ル者ハ、正シク吾家ニ伝ヘシ所ニシテ、其本肥州定
公ノ頃ト為ベシ、定公ハ、在世正平ノ頃ナレバナリ、不_レ然ハ、
何ゾ法印公ノ之ヲ崇ミ玉フコト有ン哉、自ラ其事理如_レ斯耳、予

因テ慮ニ、歷年ノ物、久フシテ、朽壞ニ及ンコトヲ懼レ、板谷桂
舩ニ請テ一幅ヲ摸写シ、本紙ヲ熙ニ与ヘ、永世家傳ノモノトシ、
摸幅ハ清ガ所藏ト為シ、加ニ表装ニテ以テ収ム、不_レリ_レ図シ、古画ノ
今ニ現ルノミナラズ、実ニ因縁ナリキ、又曰、本紙ヲ熙ニ与ルノ
時、熙予ニ頼テ表装ヲ修センコトヲ請フ、予乃装匠中沢ナル者ニ
精貼ヲ命ス、中沢表装ヲ成シ、而携来テ曰、此画中古以上ノ物、
全ク二三百年ヲ踰タル者ナル当シ、於業多ク古書画ヲ視ル、其
鑑ル法、其書画ノ時代ヲ識ルニ有_ラズシテ、其紙ノ年歴ヲ鑑ルニ在
リト、因テ文和元年ヨリ算_ルニ、至_レ今四百六十年、然ル
トキハ、中沢ガ二三百年ヲ踰タルト言シ、皆近世ノ物ニ非ルノ証
也、又群書類聚ニ載タル巨勢系図ヲ見ルニ、有茂有久兄弟アリ、
有茂、雅樂助、從三位、隱岐守、後伏見院ノ上北面ト、茂、重、
訓同フシテ、且時世モ亦近シ、全ク同人也、亦左証トス、文化八
年辛未ノ十月シルス

(『新增書目 内篇 卷七下』「雑雑之部 画図之中 仏像」)

●嵯峨清涼寺釈迦仏真容

一幅

原図白川少将定信朝臣藏、文化辛未夏摸写ス、○此像ヲ獲タル
所以ハ、予嘗テ思フ、嵯峨ノ釈迦尊ノ像ハ、世普所_レ知ニシテ、自
レ古所_レ尊尚_レモノ也、然ドモ仏像其要無_レ益ニ帰ス、因テ欲_スレ真
レ之下モ、亦天下ノ一奇物、此意變ニトシテ不_レ能_レ止、故ニ遂其真
容ヲ写ンコトヲ念フ、サレドモ山川千里ニシテ、其事ヲ成スニ無_レ
由、然ニ享和改元ノ夏、主僧奉_シ来テ、両国橋東ノ回向院ニシテ開
扉ノコトアリ、此時沢田千之、好古ノ志ヲ奮ヒ、犯_ニ寺禁_ニ竊_ニ其
台坐ノ銘ヲ模取ス、則予其一枚ヲ得タリ、然ドモ真容ニ至_ッテハ、

千之モ亦竟ニ獲レ之ニ路ナシ。此後十年ヲ歴テ、文化庚午ノ夏、復来テ回向院ニ於テ開扉ス。予此時既ニ牛島ニ退隱ス。回向院ト居近キヲ以テ、頻ニ彼ノ像ヲ写シコトヲ欲ス。然ドモ又遂ニ無レ可キ。憑^ル。而秋九月開扉畢リ、遷シテ増上寺中ノ宿坊某院ニ奉寓シ。信仰ノ輩ニハ、於レ此開扉拝礼セシム。予乃密ニ増上寺中ノ僧某ト謀リ、彼司僧ニ私シ、像ニ就テ真容ヲ写ントス。事成ル。因テ板谷桂意カ輩ト議シテ、其事ニ及ントス。予トキニ思フ。事既ニ整フ。今將ニ之ニ及ントス。然ドモ彼私写ヲ許ト雖モ、其表トスル所ハ正。我雖レ似トレ尚^レニ仏、其所^レ為ハ邪、其事終ニ不^ラ十分二分ジ。因テ思フニ、白川少將ノ藏、必ズ彼像有ベシ。乃呈レ書シテ需^レ之。候果テ一幅ヲ貸ス。即此図也。此像候ノ為^ル藏^ト者ハ、故事、釈迦仏闕東ニ到ルコト有ルニハ、開扉ヲ許サル、ノ後、大城ニ入テ別ニ開扉ヲ為ス。之ニ次デ、田安君ノ第、及一橋君等ノ第、皆彼像ヲ移シテ開扉拝礼ノコトアリ。此時ニ於テ、主僧ヲ退ケテ、後宮妃員ノ族皆拝^レ之。且ッ像ヲ留テ、至^三明日^一テ之ヲ還ス。今年モマタ、田安君ノ第二移シテ拝礼アリ。此時候画臣^ヲ遣シ、就レ像前後左右俯仰檀^ニシ^レ之。其図完全ス。然^ルトキハ此像ハ、真写ノ又真ナル者ニシテ、実ニ所^レ無^ニ余^一蓋^{ナリ}。侯又曰、像ノ長横、面手衣紋、一二其尺寸ヲ以^テス。以^レ此スレバ、彼釈迦仏ノ真容ハ此図ニ止ル。予^至レ此初願得^レ終^{コト}タリ、聊以記^レ之。

(『新增書目 内篇 卷七下』「雑雑之部 画図之中 仏像」)

●地蔵菩薩像 足利尊氏卿所レ画

一幅

模写ニ枚。右ハ住吉内記ノ所レ伝ノ粉本ナリ。一ハ立像雲中ニ在ル容、加ニ彩色^ヲ。上ニ等持院殿御筆ト書ス。一ハ墨画ニシテ亦立

像、石上ニ立^ツノ容、上ニ有^リ讀^ム曰^ク、夢中ニ有^リニ感通^一。令^{シテ}我^ヲ画^カニ尊容^ヲ。利濟偏^シニ沙界^ニ。善根無^シ所^レ窮^ル。文和四年六月六日、為^メニ天化藏主ノ仁山書。而下ニ尊氏ノ花押ヲ書シテ無^シレ名。尊氏ノ所^レ画^ヲ無^キ疑^ヒモノ也。然レドモ此讀辭ノ、夢中ニ感通セシ事、未^タ何^ニ由^ル莫^シ所^レ見^ル。又本朝画史ニ云ク、等持院丞相尊氏公、政務之暇好^ムニ画図^ヲ。其所^レ写^ス有^ニ地蔵ノ像^一。自^ラ加^フニ贊詞^ヲ於其上^ニ。曰^フ、夢中有^ニ感通^一。令^{シテ}我^ヲ画^カ中尊容^ヲ上。利濟偏^シニ沙界^ニ。善根無^シ所^レ窮^ル。觀應元年十月四日、仁山書。曾^テ平日信^シニ地藏菩薩^ヲ。故^ニ画^クニ其像^ヲ者略多^シ矣^ト。此讀全^ク前^ト同^シ。然^レバ画史ニ画^クニ其像^ヲ者多^シト云ヒタルコト、有^リ所^レ捩^ルシ也。如^クレ斯^ノナレバ、尚^ホ世ニ此像ノ存ル者有^ルベシ。又文和四年ハ、北朝ノ後光厳ノ四年、觀應元年ハ、同ク崇光ノ年号、文和ノ四年ノ六年前ナリ。太平記等ノ諸書ヲ視^ルニ、此間戦争屢^クニシテ、尊氏ノ西東不^スレ定^ラ。然^ルニ此像ヲ画^ク等、其人可^シレ想^フ。又仁山ト題^ルハ、將軍譜ニ云ク、延文元年ノ四月、尊氏薨^スニ於京都^ニ。葬^ルニ於衣笠山ノ麓^ニ。号^スニ等持院^ト。法名ハ妙義。道号ハ仁山。按^ルニ、日本史引^ニ園太曆^一テ曰^ク、法名仁山妙義^ト。然レドモ二画ノ所^レ題^ルヲ以テ觀^レバ、尊氏ノ以^テ仁山^ヲ稱^スル既^ニ登^ヤシ。然^レバ將軍譜ニ、道号ト云^シ者得タルカ。然^レドモ其^レ事何^ケ年ニ有^ル未^タズレ知^ラレ之^ヲ。蓋聞ク今喜連川氏ノ家譜ニ、任^セニ京都鎌倉ノ公方之例^ニ。山号何^ト録^{シテ}。呈^スレ官^ニト云^フ。又聞ク寛永系譜ニモ、彼ノ家ニ於^ル法名山号ト別^チ稱^{スト}云^ハバ。然^レバ、是足利氏ノ故事ニシテ、思^フニ尊氏ヨリ始^リテ、受衣ノ時ヨリシテ稱^レ之^ヲ歟。將軍譜ニ云^フ、曆應三年^ニ。是年建^ニ立^ス天龍寺^ヲ。以^ニ僧疎石^ヲ為^スニ開山^ト。十二月^ニ、尊氏因^ニ母服^ニ一辭^スス。二將軍^ヲ。不^スレ許^サナド

見ユレバ・此年文和觀応ニ先ツコト既ニ十余年ナレバ・若シクハ以テ
此歳ヲ一号ル仁山ト欵・又讃辭ノ中ニ・天化藏主ト云フ・亦未ズレ知
ラ其人ヲ・

(『新增書目 内篇 卷七下』「雑雑之部 画図之中 仏像」)

●佛眼佛母像

一幅

此仏像ハ・真成院最勝房ノ修驗ナリ・此本院ハ・坂本御切手町ニ在リト云フ・
所レ藏ル・一曰予浅草寺ノ境外東南ノ地ニ・称ルニ真寿庵ト一僧ノ廢宅
アルニ往テ・雨中ニ居室及仮山ノ結構ヲ見ル・最勝房モ亦此故宅
ニ寓シ・専ラ為スニ修学ヲ・時ニ出テ示レ予・予請テ携還リ・就レ
之模取ス・住吉廣尚曰・是モト漢土ノ板刻ノ図ニ因テ模写スル者
カ・模手ハ吾邦ノ人ナラン・又問フ幅殊ニ大ナリ・如クレ此板刻ノ者
有リヤ・廣尚曰往三有レ之モノ也・予因テ思フ・備中ノ仏祖寺ノ所
レ伝ノ十二天ノ像ハ・高野大師唐国将来ノモノ也・予モ其榻本ヲ藏
ム・其原版刻ナリ・然レハ廣尚カ所レ言フ誣ナラズ・○此像載キ獅子
冠ヲ一坐スニ白蓮花ノ上ニ・自リニ花下一至テ冠頂之輪光ニ・曲尺四尺
八寸七步・其ノ容想儀軌ト較ルニ・金剛吉祥大成就品ニ云ク・尔時金
剛菩薩・復タ於テ一切如来ノ前ニ・説ク一切仏眼大金剛吉祥一切
仏母心ヲ・出生一切ノ法ヲ・成就一切ノ明ヲ・能ク満シ一切ノ
願ヲ・能ク除キ一切ノ不祥ヲ・能ク生シ一切ノ福ヲ・能ク滅ス一切ノ
罪ヲ・能ク令シテ一切有情見者ニ歡喜セシ・能ク解キ一切衆生ノ語
言ヲ・速ニ成ス諸部頂輪最勝無比奇特難勝ヲ・中略金剛菩薩對シニ
一切如来ノ前ニ・忽然トシテ現シニ作ス一切仏母ノ身・住シ大白蓮ノ身ニ
一・作スニ白月暉ヲ・両目微笑シニ羽住ス・如シレ入ニ奢摩他ニ・
略其印相・二羽虚心合掌・二頭指屈シテ附スニ中指ノ上節ニ一・如ニ

眼笑形ノ一・二空各々捻忍願ノ中節文ニ・亦如ニ眼笑形ノ一・二小指モ
復微開ス・亦如ニ眼笑形ノ一・是ヲ名クニ根本大印ト・略尔時一切仏頂
輪王・各以ニ金剛輪ヲ一置クニ於本所出生一切仏母足下ニ・各成ニ二
輪ヲ・一ハ承ニ其足ニ・一ハ覆ニ頂上ニ・略又於ニ華院ノ外ニ・四方面
画クニ八大供養・及ヒ四摂等ノ使者ニ・皆載クニ師子冠ヲ・是ヲ名クニ画
像法ト・曼拏羅モ亦如シレ之ノ・一以ニ是等ヲ一觀レハ・此ノ仏母ノ像
ハ・有レ所レ捩ルモノ也・但ク恨ム画者伝来・未タスニ共ニ詳ニセ
ヲ・

(『新增書目 内篇 卷七下』「雑雑之部 画図之中 仏像」)

●文殊菩薩像

一幅

此図ハ・今茲ノ秋骨董竹五ナル者ノ所レ示スナリ・添帖ヲ付ス・辰
ノ十一月伊川院榮信ノ所レ記ル・張思恭正筆ト云フ・思恭ハ漢人・
而今於レ漢ニ不レ云ハハ其人ヲ・狩野家多ク以ニ斯人ヲ一品スレ画ニ・蓋嘗
有ツニ此人ニテ今失ヘルナルカ・吾邦ノ書君台觀ニハ・宋人ト記セ
リ・又外箱ノ裡ニ題ス・思恭筆・宝永四年丁亥ノ十一月・沢宗極ム
レ焉ヲ・自リニ此年一至テ今ニ百十有五年・殆ト古シ・沢宗未タ其人ヲ
詳ニセズ・其画帛垢陳・彩色剥落シ・面容处处ニ存セリ・然レドモ
其像以レ可レ視ル・画生板屋伊三郎ニ命シテ・以レ所ヲ其見ル模ニ
写シ之ヲ・而為レ藏ト・又予カ所レ思フ・所ニ其筆ル一ノ体・漢人ノ画
ト云フ者ハ不スレ穩ナラ・蓋シ世ニ古土佐ト云フ者ナル当トシテ・乃画
家ニ就テ評論スルニ之ヲ・狩野洞益カ所レ見ルハ・伊川ノ張氏ト鑑ス
ル者ハ・益ハ不可トシテ曰ク・恐クハ古土佐ノ類・漢人ノ画法ニ
ハ非ス・住吉廣尚カ所レ見ルハ・君ノ所レ見ル倭画トスル無キ違フノ
ミ・雖レ然リト本ト模ルニ思恭ヲ一者ト為ハ可シレ從フ・思フニ建長ノ前

後、某僧ノ所レ画ル。上筆ナリ。一依テ算スルニ建長ヲニ。自リ三元年一
至テ今五百七十二年。吾後深草ノ朝ニシテ。漢ハ晩宋理宗ノ淳祐
九年ナリ。然レハ思恭ヲ宋人トスル時世協コト。其像容。戴ニ宝冠
ヲ。持ニ如意ヲ。居リニ蓮坐ニ。乗ル獅子ニ。環珞衣帶異ル。常ニ者多
シ。獅子モ亦四足踏ムニ蓮華ヲ。思フニ珍蔵ニシテ。奇物ナル而已。文政四年冬
記

(『新增書目 内篇 卷七下』「雑雑之部 画図之中 仏像」)

●立像不動尊同二童子像 模本 土佐越前守長隆ニ定ル 一幅

コノ像。二三年前或売携ヘ来テ示ス。曰ク。昔シ蒙古来寇ノ時。降伏
修法ノ為シテ興正菩薩ノ自ラ画テ本尊トセシ者トゾ。予熟視スルニ
尊ノ長ケ二尺四寸。劍ヲ担ギ疾歩ノサマナリ。後炎風ヲ帶ブ。二童
子モ亦前ニ走ル。矜羯羅ハ弓箭ヲ執リ長ケ一尺一寸七步。制多迦ハ
棍ヲ携ヘ長ケ一尺一寸二步余。ソノ体真ニ前説ノ如シ。又嚮ニ住吉
氏ノ所レ鑑ルノ記アリテ附ス。曰ク

不動尊二童子一鋪。右從五位ノ下越前守長隆真筆無疑者也。文政
四年辛巳二月廿一日。住吉内記広尚ト。時ニ原幅価ノ高貴ナルヲ以
テ。住吉氏ニ就テ模写令シテ。尋テ売ニ返ス。按ルニ土佐系図ニ
云。長隆ハ土佐權守吉光ノ子。從五位ノ下越前守。号ニ姉小路。快
閑。後宇多院ノ時。然レバコノ帝ノ即位ハ建治元乙亥ナレバ。蒙古
ノ来襲セル弘安四辛巳ニ先ツコト七年。且快閑ハ法名ナランニハ。
此人蚤世ノ者ナラジ。又興正菩薩ハ後伏見帝ノ勅諡ニシテ。諱ハ睿
尊。高僧伝ニ云ク。和州西大寺沙門。釈ノ睿尊字ハ思円。弘安四年六
月蒙古窺ニ觀ス我國ヲ。以ニ三船六万卒十万人ト云。五竜山ニ。後宇多
帝延議ス。群臣僉曰ク。非ニ弘法ノ力ニ決シテ不レ可レ伏ス。於是ニ擇

テニ南北京ノ僧五百六十員ヲ降伏ス。蒙古ヲ。尊モ亦上テ選ニ就テニ于
城州男山八幡宮ノ前ニ。七月朔日集テ衆ヲ説戒シ開キニ仁王会ヲ。修ス
ニ愛染ノ法ヲ。至リニ其散日ニ尊向テ神殿ノ啓シテ曰ク。云云。時ニ雷俄ニ
起リ向テ西方ニ去ル。是ノ夜西海神風相撃テ。賊船覆碎シ。蒙古鑿蓋
スト。コレ等ニ因レバ。古昔信ナシト雖ドモ長隆ノ画キシハ画家ノ
所レ鑑スルナレバ。論ナシ。又興正ノ描キシト云フ者恐クハ無替ニ出
テ取ルベカラズ。且愛染法ヲ修スルニ不動ノ像ヲ本尊ト為スベカラ
ズ。去レドモ斯ノ像ノ容体ヲ觀レバ何カニモ降伏ノ状アリ。然ルト
キハ若シクハ興正構ル壇ヲニ及ンデ。長隆ヲ令テ尊容ヲ新調セシ者
ナラン欤。又興正ノ逝スル。高僧伝ニ正応三年九十ト云ヘバ弘
安四年八十也。傍ク兩人時代符スル耳。

追補ス

萩長曰ク。今西大寺流密教ノ秘口決ト云ハ。愛染王ノ法ヲ修スル
トキハ。不動ヲ中尊トシ。壇上ニ愛染ト仏舍利トヲ左右ニ置テ祈
ル。コレ興正菩薩ノ法ナレバ及テ今西大寺流ト云。蓋シ蒙古降伏
ノ時ニ起ルト。又云。抛レ之バ彼ノ二童子ノ矜羯羅ハ。モト柔和ノ
相ニシテ蓮華ヲ持スルコト。常ナリ。然ルヲココニ画ク者ハ惡相
ニシテ手ニ弓箭ヲ執レバ。是全ク愛染ノ三昧耶形ナルナリ。然ル
トキハ前考ニ。此像興正ノ造意ニシテ長隆画クトスル者得タリト
為スヘシ。因テ自ラ信ス。

又コノ原幅売者ノ手ニ有シ時。其軸素木ナリシガ。云ヒ伝フ彼ノ降伏
ノトキ。護摩ノ乳木ヲ以テ造シ者トゾ。前説ニ抛レバ此事モ誣ナラ
ジ。思フニ當時ソノ壇上ニ掛ケシノ伝ハレルヤ。至レ今流転滯零殊
ニ悲ムベシ。弘安四年ヨリ距レ今コト五百四十五年。古物也。

(『新增書目 内篇 卷七下』「雑雑之部 画図之中 仏像」)

●犬追物屏風圖

享和元年辛酉季秋因小笠原平兵衛家藏屏風模写

八枚

平兵衛曰、此屏風、吾家二先祖以来持伝フ、嘗テ上覧ニ入ト云、而其時代ヲ記セズ、亦伝来セシ年数不詳之、思ニ享保十二三年ノ頃ト爲乎、一、扨之徳廟ノ時ノ事也、其図画者亦不詳、視之ニ狩野家流ノ所描ナリ、其状此射ノ故実ヲ觀ニ足レリ、因襲藏シテ今年ニ至ル、然ニ文化乙丑秋、住吉内記ト廣行大城ニ邂逅シ、画事ヲ語り此コトニ及ヘリ、内記曰、其図ノ原本ハ京都ノ官庫ニアリ、官庫ハ禁裏ノ御庫ヲ云フ土佐光茂ノ所筆ナリ、則其模本今内記ノ家ニ伝フ、因先年小笠原ノ図ト比照スルニ、彼図ハ故実ニ暗キ者ノ所描ニシテ、衣様服制コトニ古ト違フ、官庫ノ模ト云者ハ大ニ可見モノ有リ、然トキハ小笠原ノ所藏ハ、徳廟ノ時、官庫ノ図ヲ上覧アリシトキ、彼其弓馬ノ家ナルヲ以テ、模藏ヲ命ラレシ者乎、要スルニ以官本原ト爲ベシ、予カ藏本ハ其図之ニ劣レリト雖、亦今ノ体ヲ以テ見トキハ、殊ニ古色ヲ觀ニ足レリ、文化二年乙丑八朔退朝而記、再曰、画史云、光茂、光信之子、享祿五年任刑部大輔、享祿ハ後奈良ノ朝、自五年至今二百七十四年、時世殆古シ、

（『新增書目 内篇 卷七下』「雑雑之部 芸術之中 射御総載」）

●花鳥之圖真蹟

有二題辭

一幅

此幅、一曰骨董肆ノ某齋来テ請レ購ヲ予其畫ノ不レ凡ナラヲ以テ、彼レガ望ニ從フ、其図下ニ岩有テ、傍ニ野薔薇花アリ、二白鷺水中ト岡上ニアリ、白蓮ノ開花セルニ、蓮房ニ魚狗トマル、又柳樹ト覺シキガ、幹バカリヲ画キテ紙中枝葉ヲ見ズ、又ソノ、枯枝アルニ所鳥止ル、其向ニ柘榴花ノ如キ一枝アリ、絵ヤ、剥落スレドモ、着色ノ状粗彩ニシテ還テ常

ナラズ、又畫上ニ題辭アリ、曰ク、白蘋香裡鷺鷥飛、一陣ノ清風送ルニ夕暉、鱸魚江上客未タレ帰、（喚頭）小蛾眉倚朱欄、紫袖垂、

白蘋香調ノ憶王孫、隆武丙申ノ夏日写スニ于碧梧草堂ニ檜亭、一コノ下ニ一印ヲ押ス、天保九如ノ四白字、印面ニ因テ考ルニ、鑄印ニシテ蓋シ金材ナル者カ、又此詩必ズコノ画讀トモ覺シカラズシテ、自ツカラ慨歎ノ意アリ、又隆武ノ号ニ因テ考ルニ、隆武ハ末明ノ唐王ノ号、タダ一年ニシテ丙申ノ干支ニ非ズ、清順治三年丙戌、吾^カ正保三年丙戌ニ当ル、然レバ丙申ノ夏日ト書セシハ、隆武ノ夏ノ丙申ノ日ナルベシ、因又明史葉清朝ノ撰ヲ按ズルニ、清ノ太祖ノ順治三年乙酉、明ノ端王ノ孫唐王聿鍵、閏六月丁未、自^ニ立^{シテ}於福州ニ偽^ニ号^ス、隆武ト、コレヨリ順治三年丙戌ノ秋、唐王被^レ執ハ死^スニ於福州ニト見エタレバ、若クハコノ画及題辭モ、カノ唐王ノ畫面カ、左スレバ丙申ノ夏日ハ、隆武ノ明年秋前ノ夏日ナルベシ、今ソノ何日トスル算スルニ由ナシ、又天保九如ノ印文ニ扨テモ、自ツカラ王記ノ印体ト見ユ、○梅塢居士ガ云ルニモ、予ガ所^レ云フト各々異ナラズ、正シク未明主流離ノ間ノ書画ナラント、○又林子ニ示セシニ、何カニモ庶人凡庸ノ者ナラズ、隆武明李ノ筆唐王ト云ハンモ然ルカ、画ノ拙ナル所還テ風韻アリ、貴人ノ所^レ画クトモ云フベシト、○因テ谷文晁ニ鑑セシメシニ、孰レカ鑑定ハ到ガタケレドモ祭酒ノ言ノ如ク唐王トセンモ可ナリ、要スルニ全ク明末貴族ノ画ト爲当シト、○晁又曰、唐王ノ御筆ナラバ、画上ニ大印アルベシ、左無ケレバ其頃ノ臣下ノ所^レ画ツカ、又詩ヲ見レバ、明ノ衰世ヲ歎ク詞有ルト聞コユト、然レドモ梅塢ガ言ノ如ク、流離間ノ画、大印ノ沙汰ニモ有ラザル乎、○住吉廣尚ガ云フニハ、全ク王若水ニ扨テ画ク者ナリ、柳幹ノ絵キ方^タ珍ラシ、画人ノ筆法ナラザレ

バ・貴人ノ画カ。○愚考ニハ、画者ヲ檜亭ト記ルヲ以テ見レバ、明ノ福州ハ東漢ヨリ晋ニ至テ会稽南部ノ地、字書ニ拠ルニ、会説文作ル^レ檜^ニ、檜又通シテ作^レ檜^ニ、檜通シテ作^レ会^ニ、儀礼ノ士喪礼ニ曰^ク、檜ハ用テ組^ヲ乃^ス筭^ヲ檜読^テ与^レ檜同シ、書^ル之^ヲ異^ル耳ナドアレバ、檜亭ト号セシハ、周礼ニ楊州ノ山鎮ヲ会稽ト曰フ、注ニ会稽在^リニ山陰ニト云ヘバ、古ノ楊州ハ即明ノ福州ノ地、由テ会稽山鎮ノ亭ト称セシ意カ。

(『新增書目 外篇 四之下』「芸術家 画録」)

天帝圖 極彩色真画 模写

一幅

丙丁燼餘ニ云、幀中ニ帝者ノ如キ人椅子ニヨリ、左右官者ノ如キ立、其外ニ侍妃或ハ天女形ノ人アリ、帝後ニハ諸天ノ如キモ立テ、下ニハ五方ノ神、温元帥、閔元帥、馬元帥、趙玄壇ノ像ヲモ図シ、纛旄幡旗ヲ建テ、雲形屏ノ如キアリシ、定シテモト唐画ニシテ道家ノ祭レル所ナラン、因テ姑ク天帝ト称シキ、此図嘗蟄和州ノ蔵ヲ写シタリシカ、又侘ヨリ得シカ、今忘ル、蜷川モソノ宅失火自焼シテ、多ノ品灰尽シ、此図モ亦亡セリト聞ク、然ルトキハ、今何ゾレニカ此図アラン、後遂ニ住吉内記ガ所蔵アルヲ聞テ、即就テ模取ス、此図トス。

(『新增書目 外篇 四之下』「芸術家 画録」)

注

(1) 拙稿「松浦静山の絵画考証について」『『新增書目』を中心に』(『鹿島美術研究』年報第二十二号 二〇〇五年十一月)

(2) 拙稿「住吉・板谷家の絵画鑑定」『板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に

関する総合的研究』(平成二十三年度～二十七年科学費補助金研究成果報告書 二〇一六年三月)

附記

『新增書目』の熟覧においては、松浦史料博物館学芸員久家孝史氏に御尽力いただき、貴重な御助言をいただいた。ここに深く感謝申し上げたい。尚、本研究資料は平成二十八年度～三十年度科学費補助金基盤研究(C)(16K02268)「住吉派の模写から見る近世御用絵師の絵画制作研究」による研究成果の一部であることを附記する。